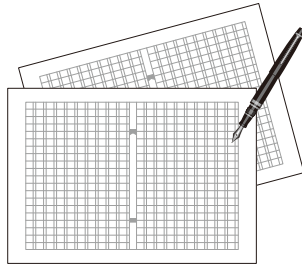


第5回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



第5回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



刊行にあたって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成22年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成26年には、11月1日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設したもので、第5回を迎えた今年度は、全国から117編の応募がありました。

本文学賞は、秋田の自然や人物、文化、風土、物産などを題材として描いた文学作品を誕生させ、多くの方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとして設けられております。県民にとって身近なものが取り上げられ、展開するストーリーは、県民の興味や関心を引きつけるとともに、これまでとは違う秋田の魅力に気づかされます。

本は、人の心を動かし、勇気や希望を与えてくれます。また、過去・現在・未来、そして想像の世界を自由に行き来できる、夢の扉でもあります。その扉を開き、様々な世界観に触れることは、私たちが別世界へと誘い、脳の活性化やストレスの解消に役立つとも言われています。

今後も、県民の皆様が読書に親しむことによって、御家族や御友人と大切な時間を過ごし、心豊かな人生を送ることができるよう、読書活動の推進に力を注いでまいります。

結びに、本文学賞にたくさんの方の御応募をいただき、心から感謝申し上げます。

平成31年2月1日

秋田県企画振興部長 妹尾 明

目次

第5回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

ことねとあまね

受賞者のことば

渡部麻実・・・7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

入道崎恋歌

受賞者のことば

畠山政文・・・43

第5回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

神代駅から

受賞者のことば

渡辺礼司・・・83

◇ふるさと秋田文学賞佳作

夢のあと

受賞者のことば

堀川茂進・・・101

◇選評

秋田の裏も表も存分に

内館牧子・・・

書くことで見つかる新しい世界もある

塩野米松・・・

地域文学賞として高水準の受賞作

西木正明・・・

◇特別寄稿

真理を表す二つの様式

柴山芳隆・・・

◇秋田県の読書活動推進施策

・・・

◇作品募集要項・応募者内訳

・・・

第5回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

ことねとあまね

渡部 麻実・作

ことねとあまね

ことねとあまね。それが私たちの名前。私たちは一卵性双生児として生まれ、母は美しかった琴音をとりわけかわいがった。一卵性だから顔はほとんど同じはずなのに、なぜか琴音は美しく、私はそうではない。つくづく人の美醜など、本当に何ミリ単位のあやふやなものに支えられているのだと思う。目の上の瞼に刻まれた二重の筋の深さ、その幅の広さ、黒目の大きさ、小鼻の直径、唇の厚さ、笑うと浮き上がるほうれい線の深さ、そういったもの一つ一つが少しずつ違って、最終的に琴音と私を明確に両側へと分けていく。

琴音は自分でもその美しさが人々に賞賛されうるべきものだということを、三歳になる前には理解していたようだ。その頃一緒に撮った写真には、お揃いのドレスを着せられて、似合わないなりに笑顔を作ろうとして一層みじめな顔になっている私と、すっかり洗練された、それでいて子供らしく愛きょうのある笑顔で首をかしげ、スカートの端を持ち上げて、今にも舞踏会の会場への階段を一步ずつ降りていくようなポーズをとる琴音がいる。

「ませがキ。気持ちわりい」

そう言ったのは、三つ上の兄だった。私たちが小学校にあがった年だ。小学生になると、母は琴音だけに新しい服を買い与え、私には兄のお下がりを与えた。かろうじて伸ばしていた髪が、私が女だということを主張していたが、それ以外に証明するものはなにもなかった。兄の

ボロボロのジーンズを履き、首元がデロデロに伸びたTシャツを着ると、スカートよりもずっと自由で楽だった。反対に琴音はリボンの沢山ついたブラウスや、チュールでふわふわに膨らんだスカートを履いていて、母は度々担任の教師から「華美な服装はちよつと……」と注意されてきたようだが、

「本人が着たいって言うてるんですよ？ 個人の自由を、権利を否定するんですか？ 誰にも迷惑をおかけしていませんのに」

と聞く耳をもたなかった。母と琴音はまたたく間に有名人になり、その双子の妹である私も一瞬注目が集まるのだが、その誰もが同情の混じった気まずそうな態度で目をそらすのだった。なぜだろう、私は不幸なんかじゃないのに。

私は琴音が好きだった。琴音を毛嫌いする兄の事も、私なんて眼中にない母の事も好きだった。そして、家族全員にたいして興味のなさそうな父が一番好きだった。父は母のすることに賛同もしなければ、たしなめることもなかった。ただこちらが求めれば、できる限り応えてくれようとした。母は充分すぎる生活費を受け取っていたし、私は欲しい本は全て買い与えられた。琴音や兄がなにをもらっていたのかは知らない。私の世界には、私と、本と、それをくれる父が真ん中にいて、それ以外は些末なことだった。

そんな世界に外の雑音が大きく聞こえてきたのは、高校二年の秋のことだった。

「……さねばね」

普段は方言を嫌って、標準語で話していた母の、暗く地の底から響くような低い声でのそんな言葉を聞いたのは十数年ぶりだった。前の時は確か、私たちの祖母の家へ行っていたときのことだ。その頃、一年に一度挨拶に行く祖母の家で、母は普段の標準語や、美しいスーツ姿は封印し、薄汚れた前掛けにスパーで買ってきただうでもいい服を着て、家事の手伝いをしていた。床がミシミシと音を立てる古い台所。チカチカと点滅したり、直ったりを繰り返す蛍光灯の下で母は

「はらわり」

とぼそつとつぶやいたのだ。それは祖母が外の物置へ、手作りのハタハタ寿司を取りに行った数分のことだった。それまで二人の間では、世間話のように子供の生活態度や教育についての話がされていた。

「あい、はらわり、はらわり。うるせ。かまうな。はやぐしねばい」

私は初めて聞くその言葉に、彼女はなにか呪文を唱えているのかと思っただけだった。それほどまでに美しい母の顔は陰鬱にゆがみ、白く表情を失っていた。北側に作られた寒くて暗い

台所には、あのとき確かに魔女がいた。

「おお、さみさみ。しばれる」

ステンレスの大きなボールに、樽から出したハタハタ寿司を持って祖母が帰ってくる。兄も琴音もそれが嫌いだった。祖父と、あとは私と父だけが好んで食べた。私は特に上に乗っている赤いふのりが好きだった。母は、どうだっただろう。食べている姿は思い出せないし、好きだとも嫌いだとも聞いたことはなかった。

祖母が帰ってくると、魔女は少しだけ表情を和らげて、それまで通り手伝いに没頭した。チカチカしていたはずの蛍光灯も直っていた。不思議な光景だった。

さねばね。母は確かに父に向かってそう言っていた。夜中に目が覚めてしまった私が、キッチンで牛乳を飲むと、階下に下りた時だった。家人はみんな寝ていると思っていた私は、できるだけ足音をたてないように階段を下りた。すると、うす暗く常夜灯だけがともしてあるダイニングテーブルに、二階で寝ているはずの父と母が向き合って座っていた。

「琴音はこれから……なんだや。天音ならまだしも……なんで琴音が。絶対に……せてはなんね。……して、なかったことにせねばね」

母の声はところどころ聞きとりづらく、父の返答はまったく聞こえなかった。私は牛乳を諦めて部屋に戻ることにした。父と母が話し合っていることなどまづない。ということはおそろしい話であるわけがない。琴音と私の名前が出てきたことが気にはなつたが、それを確かめることの方がずっと怖かった。なにより母の方言は、それ相当の重みを持って私の上にのしかかっていた。野生動物が本能で危機を回避するように、私は踵を返して二階に戻った。普段はそれほど私のいうことを聞かないはずの体が、まるで本当に野生動物になつたかのようにしなやかに、すべるように階段を上る。

部屋に戻ると、琴音は相変わらず愛らしい寝顔をして、ピンクにレースの縁取りがされた薄がけ布団をすっぽりと首までかけて寝息をたてている。私は彼女を起こさないように、二段ベッドの上へと戻った。天井ギリギリの私のスペースはあと三センチ背が伸びたら体を起こすこともできないくらいだ。私は兄のお下がりのタオルケットにくるまる。もうあちこちからループが出てきて、それがかえってふわふわと肌触りよく私にさわった。母たちが何を話していたのか気になるが、今は喉の渴きを忘れるためにも寝よう。全ては明日また考えればいい。目をつぶると間もなく、私の中に夢が流れ込んできた。暗い暗い宇宙の中を、星から星を辿ってどこまでも泳いで行く夢だった。

それから数週間後、進路相談の三者面談の日。母は学校に来なかった。琴音は朝から気分が悪いと言って、布団から出てこなかった。

「琴音も進路相談でしょう」

私がそう言うと、琴音は

「天音ちゃん、私の分も聞いてきて」

とバカみたいなことを、真剣な目で頼んできた。

「無理に決まってるじゃん。藤堂がどれだけ怒ることか」

藤堂は私たちの担任で、剣道部の顧問だった。いつも竹刀を手にしていて、それで叩くことはもちろんなかったけれど、黒板を指したりするので保護者からも生徒からも評判はよくなかった。けれど私は彼がテストの監督の時に、ふと単行本を出して読む姿を見てから、それほど苦手には思わなくなっていた。竹刀を足の間に挟んでその上に両手を置き、本を開く姿は少し滑稽で、彼の真面目な性格を表しているようだった。なにより本が好きな人に悪い人はいないというのが私の持論だった。

「だってさあ、私、天音ちゃんみたいに頭もよくないし、行きたい大学も、やりたい仕事もな

いんだよお。言われることなんかわかってるし、相談する進路もないもん」

琴音は語尾を伸ばすいつもの甘えた口調でそう言った。

「とりあえず、私は行くから。藤堂とお母さんに琴音は体調悪いみたいって伝えておくね。ちやんと寝ておくんだよ」

琴音は返事の代わりに片目をウィンクすると、布団にもぐりこんでスマホを見始めた。私はその背中を見ながら制服のリボンを結び、家を出た。琴音のことを伝えた時、母はどこか違うところへ意識を飛ばしてしまったようにぼうっとして、たいして返事もしなかった。放課後になり、予定された時間まで図書館で本を読んでから教室に戻ってみると、困った表情の藤堂がひとりぼつんと竹刀に片手を乗せて立っていた。

「ご自宅に電話したんだけど、お母さん電話に出られねな。なんとす。二人でやるか」

私は「じゃあ、とりあえずお願いします」と言って椅子を引いた。

「んだか。せば、簡潔にやるか。天音、おめ、大学さ行け」

藤堂は名字の同じ私たちのことは下の名前で呼んだ。いや、生徒によっては名字だったり、名前だったりしたからあまり深い意味はなかったのかもしれない。でも私は彼が呼ぶ「あまね」という響きが好きだった。

「大学、ですか」

「んだ。これ、まだ配ってねえこの前の全国テストの成績な。お前上位にいるのわかるか。この成績なら、東京のSクラス受けてもいいし、Aクラスならまらず大丈夫だ。できればSに挑戦してほしいどもよ。これは俺だけでなく、学年主任の先生も言っていたでよ。考えでみでくれ」

Sクラスというのは東京大学、早稲田大学の他そうそうたる名門大学のことを指す。今まで全国テストというものを受けたことがなかった私は、自分が同年代の中でどれぐらいの成績なのかわからなかった。学校のテストではいつも上位一桁に名前があった。けれど、その相対的な評価を知らなかったのだ。

「あの、琴音は」

朝見た彼女の顔を思い出しながら聞いてみる。そういえば少しやつれた。あながち仮病でもなかったのかもしれない。

「琴音か。あいつは、いいとこ地元の短大だな。就職が一番現実的だべな」

勉強が苦手な琴音はいつも私のノートを写していた。本当ならこの高校に入るのも難しかったが、高校受験までは付け焼刃でもなんとかあった。琴音が私と同じ高校に入ることはそのこ

ろの母には絶対の悲願だったのだ。琴音には家庭教師がつけられ、その家庭教師が来られない日は私が琴音の勉強の面倒を見させられた。そうしてなんとか私たちは同じ高校に入学した。あとから聞いた話だが、琴音の筆記の成績は二点足りずにギリギリ不合格だったが、面接の点数で十点近く上乘せされ合格できたらしい。誰からも愛される風貌と愛嬌、それは母の用意した少女趣味な洋服なしでも充分に発揮される彼女の最大の武器になっていた。

高校に入ってから彼女の彼女の成績も、下から何番目というのが定位置で、下がることはあっても上がることはないに等しかった。母は琴音の成績表を見て毎度「ふう」と大きなため息をつくのだが、二言目には

「女の子だもの。勉強がどんなにできてもねえ。いつかお嫁さんに行くんだから、適度にできればいいわ」

と言つて、ニッコリと笑うのだった。高校受験でなんとしても進学校に進ませたいと目を吊り上げていた母の姿はもうそこにはなかった。どこかではつきりと諦めがついたらしい。そのうち琴音はほとんど強制的にお花と日舞を習い始めた。所作が美しくなるのだと母は言った。本当はお茶も習わせたかったのだが、琴音は高校の茶道部に入るからと断った。母は彼女の言葉信じていたけれど、籍こそあれ、琴音が部活にいそしんでいるという話は聞いたことがな

かった。琴音は学校が終わるとさっさと校門から出て行って、ちよと部活動が終わって帰宅する時間になると家に帰ってきた。習い事のひとつも勧められなかった私は、気分によってまっすぐ家に帰って勉強したり、図書館で本を読みながら、校庭のサッカー部や野球部の練習に目をやってみたり、あるいは電車に乗って隣の本屋に行ったりした。そこにお目当ての本があるわけでもなかった。ただ、どこかにふわふわと浮遊していたかったのだ。それは母からの期待を受けない私だけの特権だった。母は相変わらず琴音だけを見て、彼女に自分の好きな着物を着せ、習い事へと送り迎えしていた。

日舞の発表会があると、母は誰かれ構わず招待状を配り歩いた。地元の大学へ進んでいた兄の友達やその親にまで配っていた時は、さすがの兄もカチンときたようになにか文句を言っていたが、合格祝いに買ってもらった車の事を言われるとそれ以上は言い返せないようだった。藤堂が私ではできれば東京の上位大学に行った方がいいと言った。それは大きな意味を持っていた。私は私であることを許されたのだ。そして琴音とははつきりと違う人生を進むことを。兄も私たちが幼い頃は優秀だった。いつからか口数が少なくなり、家に帰らない日が増えてきて、成績も低迷した。地元の大学に行くことを決めたのは兄自身だったけれど、そのことをいつも悔んでいた。

「家を出たかったのに、目先の遊びに夢中になってこのざまだよ。家からも地元からも離れられなかった。天音、お前は家を出ろ。これ以上母さんと琴音と一緒にいてもいいことなんかない。うちの家族はゆがんでる。正常な形じゃないんだ」

兄はたまに家に洋服を取りに帰ってきてはそう言い残して出ていった。大学の近くの友達の家で居候していると行っていたけれど、それが彼女だと知ったのはつい最近の事だ。それは居候じゃなくて同棲って言うんだよ、と私が言うと、兄は私の頭を小突いて

「うるせえ。ガキのくせに」

と顔をくしゃつとして笑った。久しぶりに見た兄の笑顔だった。まるで太陽のように、かげりのない、心からの。

兄が言った通り、私には家を出る鍵ができた。母はなんと言うだろう。いや、なにも言わないに違いない。「ああ、そう」といつものように興味なさそうにうなずくだろう。父は、少しさびしそうに口を曲げてから

「行きてば行け。金は出すから」

と言うだろう。聞くまでもなく、私には二人の事が手に取るようにわかる。琴音は。琴音がどんな反応を示すのか、それだけが分からなかった。私たちは正反対のように育てられたけれ

ど、お互いのことを嫌いだと思ったことはなかった。そして離れるという選択肢もないままに一緒に育ってきた。彼女は私が東京の大学に行くことでどう変わるのか、なんと言うのか、それだけはどんなに想像してもわからなかった。

その日、よく親と相談するように言われて家に帰ると、家には誰もいなかった。朝、寝ていたはずの琴音もいない。時間は七時になろうとしていて、そんな遅くまで習い事のお迎え以外で母が家を空けることはなかった。私は冷蔵庫の野菜室に転がっていた魚肉ソーセージを剥いてかぶりついた。柔らかいソーセージに歯形がついて、噛みごたえないそれは何本食べても腹にたまらないような気がした。

やがて時計が回り、八時になったところで母の車のエンジン音がした。ドアを閉める音が二回する。母と琴音は一緒に出かけていたのだろう。琴音の具合が悪くて病院に行っていたのだろうか。少し身構えてリビングで待っていると、入ってきたのは母と琴音ではなく、母と父だった。

「あれ、琴音は？ どうしたの？ 具合悪いの？」

まさか入院でもしたというのだろうか。心配する私に、父も母もなにも答えてくれなかった。

「天音、まずは制服を着替えれ。お寿司買ってきたから、食べるべ。母さん、お茶入れてけれ。煎茶のぬぎやつ」

母は無言でやかんに水を注ぎ火にかけた。カチッ。ボツ。というガスコンロの音がいつもより大きく響いた気がした。私は二階へ上がり、部屋着に着替える。琴音がない部屋は、暖房を切っているからという理由以上に冷えて、空気は寒天で固められたように重い。下へおりると、父は湯気の立ちのぼる湯のみの前で、左手を額に当て、肘をついて目をつぶっていた。母はキッチンに立ったまま、どこか一点を見つめていた。私が席につくと、父は

「ああ、手は洗ったが。食うべ」

と寿司折りに手を伸ばした。私たちが食べ終わるまで、母は微動だにしなかった。寿司の空き箱を捨てにキッチンへ入ると、まるで電源が入ったアンドロイドのように私からそれを受け取り、ごみ箱へ捨てた。そのまま二階へ戻ろうとする私に、父は

「ごめんな、今日は。遅くなって。連絡もしねで。琴音はそのうち帰ってくる。病気でもなんでもねえから気にすな。ちょっと気分転換しでると思ってくれ」

と言った。私はただ黙ってうなずいた。面談の事を話したいと思ったができなかった。まだ時間はある。それは今日でなくてもいいはずだった。

それから琴音は二週間帰ってこなかった。学校は病氣療養のため欠席となっており、心配を装った友人たちから色々詮索されたけれど、私が答えられることはなにもなかった。一度兄にメールをして何か知っているか聞いたが、もちろん彼もなにも知らなかった。

「花嫁修業でもしてるんじゃない？ どっか秘密の地下組織とかで」

ふざけたメールに、一瞬は気持ち緩んだが、家の中の雰囲気は冗談で済まされるレベルのものではなかった。あの日以来、父は毎晩早く帰ってくるようになり、母は気の抜けたビーチボールのように掴みどころなく、ただ、存在しているだけになっていた。二人は口論するでも相談するでもなく、ただひたすら注意深く琴音の不在を無視しながら、触れないようにしながら、それでいて意識して守っているように見えた。最低限の家事をすると、母はよくキッチンで立ったままぼうっとしていた。その死んだ魚のような目が怖くて、私はできるだけだけ自室から出ないようにしていたけれど、そこもまた信じられないくらい空気が薄いのだ。琴音ひとりがないだけで、これほどまでになにもかもが変わってしまうなんて。改めて彼女には敵わない。そう思わざるを得なかった。

そして二週間と二日たって、琴音は普通に帰ってきた。日曜日の午後のことだった。部屋で勉強していると、玄関から「ただいまー」という聞きなれた声があった。慌てて飛び出し、階段を下りる。そこにはなにも変わらず笑う琴音と、その後ろに立つ見たことのない男の姿があった。二十代後半に見えるその人は、私に目をやり、琴音に目をやり、そしてまた私に視線を戻して下を向くとクスツと笑った。私は自分の服装を見返す。部屋着として何年も着古したポロポロのグレーのパーカーに、兄のお下がりの紺のジャージパンツ。

「天音ちゃん、気、抜きすぎ。ださっ。ひどい。着替えてきてよ」

琴音までもが顔をしかめる。彼女のようにジュラートピケのかわいいセットアップの部屋着を買ってもらっているわけではないのだ。失礼だと思いつながら、私はすすすごと部屋に戻るしかなかった。

持っている服の中で制服の次にましな格好に着替えて下におりると、琴音と並んで先ほどの男性が座り、その向かいには口をへの字に曲げた父と、能面のような母がいた。私の席はなかった。仕方ないのでソファに座り、後ろを振り向くように彼らの方に体を向ける。

「琴音さんと話しました。彼女の気持ちは変わらないそうです。僕の責任です。すいませんでした。起こったことも、説得できなかったことも、全部自分のせいです」

その人はいきなりそう謝罪しました。私にはなんのことかさっぱりわからなかった。母の口が小さく動いたような気がした。「さねばね」深く地の底から這い出した人が最初に発した言葉のようだった。暗く、濁っていて、重く、湿っている。

「おろさねばね」

次の瞬間、母ははつきりと二人を見据えてそう言った。とぐろを巻いた積乱雲が、母の上だけに出現するのではないかという迫力だった。いまここで家の中にゲリラ豪雨が降り注いでも、私は驚かない。むしろそうなった方が、一瞬場が洗い流され、いい方向に行くのではないかと思うほど、禍々まがまがしい言葉だった。

「湊くんは、変わらないのかな。気持ちも、いや、気持ちより、その先か。東京に戻るんだね。それからの生活も変えることはない、と」

父は仕事の電話の時のように標準語で、できるだけ冷静に、まるで小さな子供に言い聞かせるように話していた。彼はそんな父を負けじと強い目でまっすぐに見据え、ただ短く「はい」と言った。

琴音は自分のことを話されているという感じはなく、ただつまらなそうに首をかしげている。琴音が連れてきたこの男は誰なんだろう。湊というのは名前なのか、名字なのか。母が言

った「おろさねば」というのは、やはりそういうことなのだろうか。父が言うその男の変えられないことというのはなんなのだろう。色々な形や色をしたハテナが私の頭の周りを整列したり、列を乱したりしながらぐるぐる回っていく。

「ほんとうにつ、すいません」

いきなり男はそう叫ぶと、椅子から飛び降りて父に向かって土下座した。その芝居じみた様子に、私は思わず吹き出しそうになる。琴音はそうまでなっても興味なさそうに右手の人差指で自分の髪をくるくると巻いている。父も母も一言も発しなかった。彼の渾身の土下座は宙に浮かんでパツンと消えるシャボン玉のように儂く空間に散っていった。

数分して、父は我に返ったのか

「頭を上げて、帰ってくれ」

と言った。母は男のこゝを見つめたまま動かなかった。琴音は静かに立ちあがった彼に付き添い、玄関まで行くと二言三言交わして扉を閉めた。私はダイニングテーブル側に傾けていた体をまっすぐに直し、クッションを腹に抱えた。いざという時はここに顔をうずめて隠そう。いつ私がこの緊張状態に水を差してしまうかわからなかった。

琴音は冷蔵庫からカルピスを取り出すと、それをマグカップに入れポットのお湯を注いだ。

そして改めて自分の席に座る。

「そういうことだから。私は私の人生を自分で決めようと思う」

はっとした。それはこの前の進路相談から、ずっと私があたためてきた言葉だ。あの日から父も母もそれどころではない様子で、大学に行きたい、それも東京の大学へと伝える暇がなかった。話して、もし反対されたら。その時はこう言う決めていた言葉だった。双子だからといって、こんなところで似なくていいのに。私は多分生まれて初めて初めて琴音を憎んだ。嫌いだと思つた。私が言いたかった言葉、私が先に言うはずだった言葉。それをいとも簡単に盗んでいくなんて。

「どうする？」

父は短く聞いた。琴音は両手で持ったマグの湯気をふうふうと吹きながら

「家を出る。働く。産む。それだけ」

と言つた。母はピクつと動くと「だめ、おろさねばね。おろさねばならねのよ」と何度も何度も呟いた。それは呪いの呪文だった。繰り返すことで成就する魔女の言葉だ。キッチンの交換したばかりの蛍光灯がチカチカと一瞬だけ点滅した。

「そういうことだから。できるだけ早くする」

琴音は点滅など気にも留めない様子でそう言うのと、シンクにマグを置いて二階へ上がった。そのマグにはまだカルピスが半分以上残っているようだった。

しばらくして私が二階へあがると、琴音はベッドに寝っ転がってスマホを見ていた。

「天音ちゃん、ごめんねえ。びっくりさせちゃって。ねえ、進路相談どうだった？ 私の分も話してきてくれた？」

二週間以上もいなかったことは忘れたように、琴音はあの日の話をしてくる。まるで時間が巻き戻りワープしたようだ。今日の午後に私は学校に行つて、藤堂と面談をしてきたのだろうか。

「バカ。心配してたんだよ」

私が勉強机の椅子に座り、彼女に向かってそう言うと、琴音はいたずらっぽく笑ってみせた。帰ってきて初めて見せた笑顔だった。

「だよね。ごめん。そういうことなの」

「そういうことって？」

「私、妊娠してる。まだ三カ月にならないくらい。相手はさっきの人で、町で知り合った普通

のサラリーマン。仕事はなんなのかはつきり分からないんだけど、東京から長期の出張で来る人。来年になったら東京に帰る人。そして東京に婚約者がいる人」

「琴音、あんた……」と言ったきり、言葉が出てこなかった。今まであの先輩がかっこいいとか、あそこの店の美容師のお兄さんが素敵だとか、あるいは隣のクラスの男の子に告白してみようかという話は聞いたことがあった。でも琴音が男の人と付き合うことはなかった。いつもどこからか母にばれて、説得されて終わるのだ。琴音ちゃん、あなたはもっともいい家のお金持ちと結婚して幸せになるのだから、こんなところで油を売っている暇はないのよと。お姫様は王子様と結婚して幸せに暮らしましたとき、というおとぎ話の締めくくりのように、母は何度も何度もそう琴音に話してきたのだ。それなのに。

「あの人、私と結婚するつもりはないんだって。っていうか私もそうだけど。だからお父さんとお母さんは子供を諦めて墮ろして、また前みたいに学校に行けって言ってたの。それを嫌がる私を、あの人を部屋に置き去りにして、話し合えて。でもさ、話し合ってどうにかなるもんじゃないでしょ。結婚したくない人と結婚したくない人。子供を産みたい人と、産んで欲しくない人。帰るところがある人と、帰るところがない人。だからさ、平行線。なんの意味もない二週間だったなあ。それで私は一人で家を出て、一人で産むことにした」

「ひとりであつて無理でしょ。まだ高校生だよ、私たち」

「あと一年ちよつとで高校生じゃなくなる。赤ちゃんが産まれてからは半年もないよ。それまでは、るいちゃんのとこに居候することにした」

るいちゃんというのは兄の元彼女で、大学のミスコンで優勝したこともある美人で感じのいい先輩だ。面倒見がいいことが噂を呼び、元ヤンキーだとも言われていた。

「るいちゃんちで動けなくなるまではバイトして、子供が産まれたら乳児院に預けるつもり。ちゃんと働いて、自分で部屋を借りて、赤ちゃん迎えに行くの。それからは保育園かな。しばらく秋田からは出られないと思うけど、いずれは仙台とか、盛岡とか違う町に行つて子供と二人で暮らそうと思つてる」

今までちよつとバカだと思つていた琴音の計画に、多少無理な部分があるとしても道筋がしつかりと整つていることに私は驚いていた。彼女は本気なのだ。どこかで挫折するかもしれないけれど、今の自分にきちんと向き合い、最善だと思われる道をきちんと考え、探している。

私は急に自分の大学進学が馬鹿馬鹿しいもの思えてきた。藤堂の言うとおり、東京の大学に行くことは自分の中で決まっていた。けれども、どの大学のどの学部に進み、なにを勉強したいのかということはまだなにも決まっていなかった。これからの成績次第で合格できる

ところならどこでも良かったのだ。この家を出て東京へ行くこと、それが一番の目標になっていた。琴音の目標に比べたらなんて稚拙でむなし夢なんだろう。

もう私には彼女に対して言うべきことはなにもなかった。

「お母さん、悲しむね」

ただそう言って琴音を苦しめる以外には。

「そうだね。期待に応えられなかったことは悪かったと思ってる」

琴音はそう言って、またスマホへ視線を戻した。彼女はアルバイト情報のサイトを見ているようだった。私も机に向き直り、勉強を始める。下からは誰もいないかのように物音ひとつ、話し声ひとつしなかった。誰もが息をひそめ、暮らしているこの家はまるで暗い洞窟のようだ。私も琴音もそこから抜け出す鍵を手にはしている。けれども灯りをもたない私たちはなかなか前に進むことができずに、暗闇の中で立ちつくしていた。だが、琴音は這いつくばりここから出ていくことを決めた。どんなに汚れても、どんなにみっともなくても。

翌月、琴音はさよならも言わずに出ていった。母が買い物から帰ると、もう琴音の姿はなかったそうだ。私が学校へ行っている間のことだった。琴音の不在は、やがてクラスメイトの興

味を誘うこともなくなり、父と母と私の三人になった私たち家族も、琴音の話をしようとはしなかった。まるで最初から双子の娘などいなかったかのようになり、私たちはふるまった。琴音がいなくなったからといって、母の目が私に向くこともなかった。着る人を失った振り袖は、和室の片隅にある桐箆箆にしまい込まれ、レースの沢山ついた洋服たちはいつの間にかクローゼットから消えた。二段ベッドの下にあったふかふかの羽毛布団もなくなっていたが、私の布団は相変わらず兄のお下がりやしなびた布団だったし、部屋着もボロいジャージのままだ。

東京の大学へ進学することは、あの日妄想した通り反対されることなく受け入れられた。ただ父は金を出すかわりに、と条件をつけた。Sランクの国立またはAランク上位の国立大学に合格した場合のみ上京を許す、センター試験の結果によっては後期日程で地元の国立大を受けること。仕送りは月十二万円まで、それ以上はアルバイトで賄うこと。留年した時点で秋田へ戻り就職すること。私は今までになく勉強した。おしゃれしても、メイクしても、目に見える結果が出たことはなかった。でも勉強は違う。すればするほど必ず結果を連れて来てくれた。三年になり担任は藤堂から川崎という女性の英語教師が変わっていたが、廊下で藤堂に会うといつも褒められた。私はいつしか学年一番という成績を不動のものにしていたのだ。

「天音、お前東大目指せるな。頑張れや。勉強できねがった琴音の分もな」

藤堂はそう言ってニカッと笑った。琴音が妊娠して出産したことは誰にも知られていなかった。学校向けには難病が見つかり、遠くの病院へ入院していることになっている。狭い町で大きな腹を抱えどこかで働いていたはずなのに、彼女のことは噂でも聞こえてこない。よほどうまく隠れているのだろうと思った。そういえば小さい頃からかくれんぼだけは得意だったな。

私はセンター試験で難なく高得点を取り、前期日程で東大を受験するために秋田駅へと向かった。寒い日だった。凍りついたアスファルトはその上に白い綿毛のような雪をまとい、気をつけて歩かなければ雪道に慣れた私でも転んでしまう。足底にギザギザの深いすべり止めが入ったブーツを履いてきたが、あっちに行ったらこんな靴を履いている人なんて誰もいないんだろうなと思うと少し憂鬱だ。内側にボアがついたコートも、足の色が見えないほど濃いタイツも、制服の下に着たあちこち破れかかった肌色のシャツも、なにもかもが野暮つたい。大学に受かって東京へ出ることになったら全部捨てよう。そう心に決めて、駅ビルに入る。新幹線の出発まではまだ少し時間があつた。一階の売店でサンドイッチとジュースを買おうと、足を踏み入れた時だった。見覚えのある人がそこにいた。湊という青年だ。彼はスーツにマフラーという軽装で、県産品のコーナーでなにかを手に取りじっと見つめている。

とんとん。肩を叩いて振り返った彼はひいっとお化けでも見たようなかすれ声を上げると後ろへのけぞった。その手からポロリと落ちたのは袋の中で藁につづられた凍み餅だった。

「それ、美味しいですよ。水で戻して、ストーブであぶって、砂糖醤油で食べると。ってストローブなんかはないか、あっちには」

湊は相変わらずおびえながら、私の顔とお腹を交互に何度か見返した。ああ、琴音と間違っているのかと思う。それにしたって琴音ならとつくに出産してお腹なんてもう出ていないはずなのに。

「私は天音。琴音の妹です。家に来た時、一度お会いしてますよね。そんなに似ていないでしょう。私は不細工だから」

湊はやつと状況を飲み込めたのか、体勢を整えると大きく首を何度も振った。

「不細工なんかじゃない。雰囲気は確かに違うけど、よく見たらやっぱり似てる。その、お姉さんというか、ことちゃんに」

ことちゃんと呼ばれていたことに、私はなんだか感動していた。琴音は、確かにこの人に愛されていた時期があったのだ。

「もうとつくに東京に帰っていたんだと思いました。まさかこんな所で会えるなんて」

年が明けたら東京へ帰ると聞いたのは一年以上前のことだ。

「ああ、ああ。帰ったよ。もうこっちに部屋はないんだ。今日は出張というか、ちょっと仕事があつて一泊二日で来ていて。すぐそのホテルに泊まっていたもんだから、お土産買うところもなくてさ」

会社にお土産で凍み餅を買うのは難易度が高すぎる。私は上の階にもつとわかりやすく手軽なお土産が売っている店があることを教えた。湊は頭に手をやり、照れくさそうに笑う。

「会社もだけど、嫁さんにもね。なんか地元の人が食べるような素朴なもんがいろいろいって言われて」

嫁さん、という響きになにかチリチリとしたものを感じる。そう言えば琴音が彼には婚約者がいると言っていた。その人はなにも知らずにこの男と結婚したのだろうか。

「それなら、凍み餅もいいですけど、豆腐カステラとか、サラダ寒天とか、あ、日持ちするものならいぶりがつことか？ 最近はバター餅も有名でしょ。それともやつぱりきりたんぽにしますか？ 今はセットになつていのがあつて……」

矢継ぎ早に提案する私に、湊は面食らつたようだった。

「こんなにしゃべる子だとは思わなかつたな」

あの日、たった一度会っただけで何がわかったというのだろう。

「でもさ、やっぱり君たち姉妹はよく似てるね。とつてもチャーミングだ」

私の中になにかドロドロとした薄汚い水が泉のように湧き出てくる。急に表情を失くした私は彼に聞いた。

「琴音には会ったんですか。赤ちゃんには？」

琴音のスマホはいつの間にか解約され、彼女と連絡をとることは私にもできていなかった。るいちゃんの方からどうにかならないかと兄に頼んだが、るいちゃんも子供が産まれてからの琴音のことは知らなかった。彼女は言っていた通り、赤ちゃんを産んで間もなくその子を乳児院に預けると、どこかで仕事を始めたようだった。

湊は表情を一瞬だけ曇らせて首を振る。

「でもさ、うちも生まれるんだ。今度の夏」

まるで人ごとのように琴音のことを置いて自分の話をするこの男の神経がわからなかった。

どちらも同じ、お前の遺伝子が入った子供なんだぞと大きい声で言っやりたかった。その気持を抑え、私はにこやかにほほ笑むと

「へえ、そうなんですか。おめでとうございます」

と言った。そしてこれから受験に行くこと。もしかしたら東京へ住むかもしれないことを告げた。湊はそれはすごいねえと感心したように言った。天音ちゃんは優秀なんだね。

「名刺、いただけませんか。これから先、東京に住むことになっても、知り合いひとりいないのは不安なので、お守り代わりにも」

明らかに躊躇した様子が見える。けれども湊は名刺を差し出した。私はそれを裏返してポールペンを渡し「携帯も教えてください。無理に電話したりすることはありませんから」と言った。私の言葉を明らかに疑いしる彼に

「教えてくれないのなら、会社に電話して琴音のことを話します」

と言った。湊は観念したようだった。

「本当に、本当に電話しないでね。嫁さんが妊娠してからなんかイライラしつぱなしでさ。やれ体重が増えすぎたとか、仕事で少しでも遅くなるうもんならすぐ浮気だなんだって疑って、本当にまずいんだよ。だから電話は絶対にしないで欲しい」

湊は懇願するように何度もそう繰り返す。私は笑顔でうなずき「だから、お守りです。ただの」と言った。

去り際、私は近くにあった太巻きのバックを湊に押し付けた。花の模様の細工が美しい虎子

太巻きだ。甘いカステラ生地で巻かれた中の酢飯もびっくりするほど甘い。私は好きだったが、東京の人にはなかなか受け入れられない味だろう。体重増加を気にする妊婦ならなおさら。

「それ、美味しいですよ。私のイチオシ。奥さんも喜ぶと思うなあ。絶対買っていつてくださ
いね」

湊は、ああ、はい。と言ってレジの方へ向かった。ささやかな仕返し。でも魔女の娘として
はまだまだだろう。

新幹線のホームに立つと、また雪が降り出した。私は大きく伸びをして「あーんんんんん
んんんんん」っと叫んだ。ホームにいた何人かがこちらを振り返り、覗き込むようにして遠慮の
ない視線を送りつけてくる。私の人生は私のものと言って、本当に自分の人生を手に入れた琴
音と、その台詞を言えないまま、まだ自分の人生を手に入れていない私。母に愛され、その母
を振り切っていないなくなった琴音と、母に最後まで見向きもされないままここに立つ私。どちら
が幸せだったかなんて誰にもわからない。まだ私の人生はスタートラインにもたっていないの
だから。それでも琴音のことを考えると、勝手に競わずにはいられなかった。

東京まで四時間弱。私には手に握りしめた湊の名刺をどうするか、考える時間はたっぷりあ
る。それは英単語のカードをめくり続けるよりずっと有意義で楽しいことに思えた。雪は降り

続いていたけれど、それを一瞬で焼き尽くすほどのたぎる思いが体中に溢れてくるような気がした。私も魔女の血を引いている。母とは違う形でいつかその力を発露する日がくるに違いない。

じゃあね、行ってくるよ。私にはいない琴音に向かって言った。琴音が笑う鈴の音のような声が聞こえて、それは線路に滑り込んできた新幹線の音に一瞬でかき消された。真っ赤な車体は、細かく舞う雪の中で血のようにも、咲き誇るバラのようにも見えた。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

今日より明日は少し早足で

今回、受賞のお電話をいただいた時、私の第一声は「やっ
とですか」でした。この賞を知ってから計四回応募して、選
外一回、佳作二回を経てのやっとの大賞だったからです。と
ある方には「執念ですね」と言われました。私も、どうして
ここまでこの賞にこだわっていたのかと思うほど、どうして
も大賞を取りたい、取るまでは応募し続けるしかないと思っ
ていました。そして、いざ大賞をいただいてみるとその嬉し
さは徐々に変化して、まだ何かを忘れているような、なにか
に追われているような気持ちでいます。



渡部 麻実

表彰式での渡部さん

父と最期の日々を書いた小説で、私は初めて賞というものをいただきました。二十七歳の時のことです。受賞の知らせをいただく少し前に、父は他界しました。そのことを伝えられていたら、病床の父はどれだけ喜んでくれたのだろうかと考えない日はありません。

私が小説を書くことをずっと応援してくれていたのは、祖母をはじめとする家族でした。昨年佳作をいただいた時、授賞式は横手でした。祖母は横手に住んでおり、その時はすでに病床にありましたが、佳作のことを伝えた時はとても喜んでくれました。その祖母に今年は大賞をとったよと報告することなく、今年の二月、祖母も亡くなりました。

私はいつも「ちよつと」遅いのです。

誰しも『夢』があり『やりたいこと』があると思います。私の小さい頃の夢は「お医者さん」で、それは叶えられませんでした。「小説家」になりたいと思ったことはありませんでした。でも私の周りにはいつもたくさんのお本があり、それらを読むことが大好きでした。いつ、その語り手側に足を踏み入れてしまったのか。でも踏み入れてしまったからには、なにか形に残るものを作っていきたいという思いが消えることはありません。

今度は「ちよつと」遅れてしまわないように、休むことなく精いっぱい書き続けていきたいと思っています。そしていつかそれが誰かの心に響くものになれば嬉しいです。

第5回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

入道にゅうどう恋歌こゝろ

畠山政文・作

入道
崎恋
歌

サービスイリアに立ち寄ったとき、あさみは、お手洗いに行ってくださいと言って車から降りました。そして二十段ほどの階段をしつかりと上がりました。しつかりと、というのはまさにそういう感じで、軽く跳ね上がれそうな躰かたなのに階段を踏みしめているように見えたのです。わざとゆっくりと躰を動かしているように見えたのです。そして階段が上がってすぐの屋台をのぞいたりしてから、階段の向こうに消えました。

そこに、黄色地に太く黒く書かれた「胡麻ソフトクリーム」という幟のぼりが見えました。かつて妻とここに立ち寄ったときのことを思い出しました。

私は財布を持ち、車を降りました。階段を上のぼっているとき、今しがた同じ階段を上のぼったあさみの姿を思いました。平らな道も上り坂もあさみは同じように歩ける若さがあります。

二十段ほどの階段を上のぼりきると、あさみがウーロン茶のペットボトルを持って、「ジャンボ焼き鳥」とか「豚串焼き」などと原色で描かれた看板のあたりを、手を後ろに組んでぶらぶら歩いています。

私は反対側の出店で胡麻ソフトクリームを買いました。吹っ切るつもりでそうしたのか、それとも妻との思い出を引っ張り出してみて自分の気持ちを確認しようとしたのか自分でも分からないのですけれども、とにかく私は買ったのです。もちろんあさみにはこの胡麻ソフトの意

味など分かるうはずもありません。自分だけでリトマス試験紙を舐めてみるようなものです。少し離れているあさみにソフトクリームを持ち上げて差し出すようにして仕草で訊くと、首を横に振ってウーロン茶のペットボトルを持ち上げたので、ひとつだけにしました。

ソフトクリームはすぐに先っぽやうずまきが融け出してきました。私はソフトクリームとんがりを唇でくわえとり、味を確かめました。しっとりした胡麻風味の甘さが絶妙な塩加減の後に染みてきました。以前にこの味を食べたのはもう十年も前になります。今はどこにでもある「胡麻ソフトクリーム」かもしれませんが、当時は珍しかったのです。天気もいいせいに見える間に融けてくるので、流れ出す前に先端をくわえ取り、全体をひと舐めして滑らかなドーム型にしました。そして階段を降りました。聖火のトーチを持って階段を降りるランナーのようだとふと思いました。炎の先端は私にもぎ取られ、丸くなったソフトクリームは右胸の前に保たれています。

階段の中ほどだったでしょうか、左肘のすき間に後ろからあさみの腕が差し込まれてきました。私の腕はしなやかなあさみの腕に絡め取られ、その軀に挟みこまれ、虜にされました。

その瞬間、何かに引き入れられたような気になりました。二人でなにげなく階段を降りているように端からは見えていないのかもしれないませんが、私の二の腕はもう別の生き物のようでした。

充実したあさみの躰の感触を、その腕は虜になりながらもまさぐろうとしているようでした。たちまち圧しつけられている皮膚が汗ばんだような気がしました。階段を爪立ちで下りているような感覚でした。階段を上がってきた中年のバイク乗りのサングラスが、絡んだ腕を凝視しているように思われました。

妻は、結婚する前もしてからも外で私の腕をとったりすることはありませんでした。私からもそういうことはしたことはありません。若い恋人同士の多くは歩いていてもベンチに座っていてもよくお互いに触れ合いますが、私たち夫婦に限ってはそういう場面はありませんでしたから、私は少なからずうろたえました。自分たちがそろって旧式の人間だったせいなのか、そういう行為はなんだか露骨な感じがしてお互いに避けていたようなところがあります。そういうのはやはり若さに任せた情熱と呼ぶべきものでしょう。お互いが身を任せている川の流れる方向を確かめるためにそうしているような気がします。まもなく流れつく秘ひそやかな世界への――。

何十年も連れ添った夫婦というのは、そういう水位が減り続け、やがて乾いた川底を手をつないで歩くようなものだったかもしれません。若い頃に熱いばかりだった「絆きずな」は、長い年月の間には、ときに「絆ほどし」となってお互いを縛りつけることがあるにせよ、また時が過ぎるに

つれて、かけがえのない絆であったと気づかせるでしょう。

残念ながらその途上で妻は私を残して逝ったのでしたが。

初めてのドライブでしたが、私とあさみにはとりあえず「吟行」——つまり俳句を詠むという目的がありました。けれど車を走らせているうちに、その吟行なるものがやはり建て前だけのような気がしてきました。少なくとも私にはそうでした。もうかれこれ三、四時間も走っているのに、どこの名所を探して車を止めるでもなく、私たちは一句もこしらえようとはしていませんでした。車を止めるところと言えばトイレのあるサービシアやちよつとした飲み物を買うための道の駅ばかりでした。とにかく地元を離れようと気が急せいでいたのかもしれない。朝日の昇る町を発ち、奥羽山脈の連なりが堅牢な隔てとなって覆い隠してくれる土地に一刻も早くたどり着いて、ほっとしたかったのかもしれない。目指す岬は、日本海に突き出した要塞のように私たちを守り、水平線に落ちてゆく太陽は、一分ごとに私たちをただの人影にし、やがて闇に包み込んでくれるはずでした。

例えば、あるやましさの中に入ってゆくには、それなりのスマートさとか気取りとか何かを認めないふりとかそういう道筋がありそうです。だからこそ私はあえていつもの自分と変わらず、ことさらにあさみの目は意識しないように思ったまま振る舞い、ソフトクリームなんぞを

ためらわず食べ、あさみが私の年相應のみつともなさに、本来の距離を取り戻してくれるならそれでもいいと開き直っていたようなところもありました。

車に乗り込むと、私が左手に持ちかえたソフトクリームに向かって、先にシートベルトを締めたあさみが手のひらを差し出しました。私はその手にソフトクリームを渡し、空いた左手でシートベルトをかちやりとはめ込みました。

ソフトクリームを受け取ったあさみは、

「おー、ゴマの匂い」

と言うなり、丸くなってしまった灰色のソフトクリームに突った舌をあて、それを口の中に収めたかと思うと、おいしい！ と私を見て目を大きく見開き、今度は唇でひと口くわえとり、ゆつくりと味わって呑み込み、うんうんと頷うなづきながら、さらにふた口目は二本の大きな前歯で噛みとり、歯形をつけてから私に戻しました。あさみのひとつひとつの振る舞いによって、この小旅行の空気が官能的な匂いを帯びていくようでした。

そんなあさみの行為は、やはり嬉しい気がしました。この頃のあさみの決まり文句は「二十代最後の年」でしたから歳は二十九のはずです。その倍ほどの年齢の私の食べかけのソフトクリームを、女友達のそれのように自然に味わっているのです。

昨日まではただの俳句教室の講師と生徒でした。数時間前、私の車に初めてあさみが乗り、住む町を離れました。お昼ごろに、昼食をどこで食べるかあさみに尋ねました。あさみはまだおながか空かないと言いました。私にはお昼時のサーブエリアで差し向かいで食べる度胸はありませんでしたから、そのまま走り続けたのでした。

あさましく急ぎはしない代わりに、どこかに止ま^{とど}っていたずらに無駄な時間も過ごさぬように、私は海に日が沈む別天地を目ざしていました。エンジンをかけるとあさみもすぐに前方を見つめました。

私は、あさみの歯形のついたソフトクリームに唇を押し当てながら、数日前の「泊可」というメールの二文字をまた強く意識しました。

「今度の週末はどうお過ごしになるんですか」

火曜日、生涯学習センターの教室で、長机をたたんで教室の隅に戻しているときでした。蝶番^{ちよつがひ}のきしむ音や床を走るキャスターの音やそっちこっちの雑談の声にまぎれて、私が引く長机を押しているあさみが訊いてきました。

「吟行にでも行きたいがねえ」

と私は言いました。実際いつもそう思っているのです。「吟行」という言葉が身近にあったからそう言っただけで、べつに俳句など作らずとも旅への憧れは常にあります。以前から仕事や住む場所を離れ、剥き出しというか無防備というか「素」というか、社会的な自分を置き去りにして、そういう自分になれる旅の時間が好きだったのです。一人で出かけることもありましたが、妻を同伴したこともありました。日々を暮らす町を離れ、知らない顔ばかりの土地でぶらぶらしていることは実に心を軽くしました。視線を向けられることも話しかけられることもほとんどなく、思うままに動けるのです。自分の肩書きや顧客だった人と出会う可能性のない見知らぬ土地では、分からないことは臆せずただ訊けばいいのだし、橋の欄干から一時間魚影を見ていようが、ふと見つけた文房具屋でしつこくあれこれ手にとってみようがかまわないのです。

今は実際に旅に出ることはまずありません。どうせ仕事もない独りきりの生活です。いつでも素でいられるのです——。散歩したり本を読んだりテレビを見たり、家で過ごしてばかりです。出不精だからこそ旅に憧れるのです。そして、怖いという理由もありそうでした。はしゃいだり驚いたりという反応には乏しい妻でしたが、それでも一緒に温泉地を浴衣で歩いたり、セルフタイマーでどたばたしては、満面の笑顔の写真を思いがけず手に入れたりしたこともあ

るのです。もし一人で旅に出たとして、独りがとてつもなく寂しくなったらどうしようかと怖かったのです。旅館の部屋で一人で寝る前に、向かいの座椅子を見つめてしまったりしないか、そして何か後悔したりはしないか、戻らない時間に苛まれたりはしないか、そんな不安が私を旅立たせなかったのかもしれない。

声を抑えてさりげなく週末の予定を訊いてきたあさみにならない、答えた私も、奥の机を片づけている「仕切り屋」のS女史にだけは聞こえないように、机を押してキャスターをきしませながら、やや声を抑えました。万が一聞きつけられて、五分後に「親睦吟行ツアー」が企画されてはたまりません。

その夜、テレビでナイターを見てみると、携帯電話が鳴りました。呼び出し音がちがうと思っただら、珍しくメールが届いたのでした。開くと、

〈吟行。秋田県入道崎。(泊可) あさみ〉

とありました。私はテレビのボリュームを下げ、もう一度携帯電話の画面を見ました。

——吟行。秋田県入道崎。(泊可) ——唐突に、体の中に海鳴りが押し寄せてきました。たちまち波のうねりは胸を満たし、私を息苦しくしました。

俳句を味わうにつけこしらえるにつけ、平仮名やカタカナと漢字の使い分けには気を配って

きましたが、仮名を全部削そぎおとすと漢字が——つまり結論だけが残されるのでした。「仮名」はその字のとおり「仮の思い」で、「真名」と言われた漢字こそが真実の思いなのではないか、などと考えながら昂揚している自分がいました。が、どうしても（泊可）という二文字に私の目は引き寄せられて身動きがとれませんでした。

そのあと二イニングほど、私はテレビの前にただ座っていました。風呂にでも入っていてメーブルを見るのが遅れたのだろうとも解釈できるでしょうし、事実の通り戸惑いと受け取られてもかまわないと思えました。画面では、いつものようにリードしているチームが抑えの投手を繰り出し、逆転劇も惜しい場面もなく巨人が負け、自力優勝がなくなりました。画面のこちら側のほうがよほど大変なドラマだと苦笑してみましたが、この返事いかんによって今後の過ごす時間がちがってくると思うとどうしても頬はこわばるようでした。

妻が亡くなって七年が過ぎていました。三年前に銀行を定年退職してからは、関連企業で勤務のゆるい嘱託をしながら、趣味の俳句を教えたり、読書に明け暮れたり、ボランティアの真似事をしたりして前向きに日々を過すごしてきたつもりでした。「〇〇銀行〇〇支店長」という肩書きを脱ぎ、体も気持ちも自由に時間を送ってきたのでした。定年前の四年は仕事に忙殺され、妻の死をしっかりと見つめることがないまま過すごしたような気がします。それがかえって

よかったのか、妻に対して申し訳ないことだったのか、いまだに分かりませんが、私は無事退職しました。そしてふと妻が襖ふすまを開けて顔を出しそうに思える心持ちをいつも抱きつつ、心中の、ある扉は封印したまま、体を動かすか頭を使うようにして毎日を埋めてきたのです。そうしているうちに私の残りの時間は燃焼していくのだろうと思っていました。刺激とかときめきというと不謹慎な感じがしますが、そういう時間に対しての期待のようなものを押し潰すのは、かつての仕事柄身に染みついていたのかもしれない。

私は大きく息をついてから、

〈入道崎了解〉と入力し、しばらく画面を見て「了解」はなんだかおかしいと、〈入道崎承知〉と打ち直し、これはさらにおかしいとまた考え、結局〈入道崎OK〉と送りました。

それが火曜日の夜でした。

次の日の夜は、あさみがなぜ入道崎に行きたいのか、その理由を述べるメールから始まりました。以前から地図を見たときに、男鹿半島が気になっていたのだそうです。この国から飛びだしたがっているような、あるいは海に沈む夕日を何としても捕まえようとしているうちに踏み出してしまったような岬――。

そこで私は、

夕焼けをとことん追えば入道崎

と、半分ふざけたような句を送りました。

あさみは、貫きます。私だけの句にします。と返信してきました。

それから待ち合わせ場所や時刻をやりとりしました。声を交わしての電話ではできないことだと思いました。声や書く文字は、自分でそ、う、話、し、、そ、う、書、い、て、い、る、の、で、す、。このメールというのは、そういう運動ではありません。ただ文字を並べるボタンを押しているのです。文字も私の文字ではありません。声を発したり、自分のクセのある字で書くより、指で叩くだけの間接的な運動は自分の「責任」とか「意思」のようなものを薄めてくれるような気がしました。あまり勇気がなくてもできる行為のようでした。

ふと若い頃の片想いを思い出しました。その滑稽な一人相撲を思い出して、私は念のため確かめようと思いました。待ち合わせ場所には受、講、生、た、ち、が来るのかもしれない。

どういう字面じづらにしようかと、ずいぶん考えました。

「ほかにダレが行くのかな？」

私は二つ折りの携帯電話——いわゆるガラケー——を卓に置いて開いたまま、しばらく見ていました。ですがそれはじつとしたままです。着信音も鳴らさなければ光りも震えもしません。今の若者たちがつながりを求めて必死にケータイを見つめている気持ちが少しわかるような気がしました。ケータイが沈黙している時間が長くなるにつれて、期待みたいなものがなんだか別の色を帯びてきました。興ざめなひと言だったかもしれない。いかにも鈍くさいセリフだったかもしれない。けれど昂揚したままばかなセリフを打てば、そのまま証拠として残るのだからそれもまたみつともないことだ、となると声は残らないわけだからそのほうがよかったのだろうか、そうは言うものの相手に送る言葉に、証拠として残るとか残らないとか気を遣うというのも裁判でもあるまいし——、だが、こんなメールを送ったと第三者に知られればそれはそれで……。まったく罪な機械だと思いました。世の中ではケータイがきっかけで起きる事件も後を絶ちませんが、それもいたしかたないことのように思いました。

そんなことを考えていたとき、ほん、と電話が鳴りました。

「ほかにダレか連れて行きたい人はイマスカ？」

またしても、はたと考えます。若い者同士がゴールを見据えながらじゃれている感覚というのはこういうものだったでしょうか。やりとりの道具が進化しても、言葉が届いたときの、嬉

しさと安心が同時に弾ける感覚は同じような気がします。

私の中にふと甦ってきたものは、文通の感覚に似ていました。

〈若い頃の自分を連れて行きたい気分です〉

思いつきを打ちました。

〈……それはちょっとコワイです〉

〈そのほうが似つかわしい感じがします〉

〈今の先生で来てクダサイ〉

さぞかし腑抜けた顔で私はボタンを押し、小さな画面を見つめていたことでしょう。

あさみの車は、インターチェンジの駐車場に置くことにしました。

不思議でした。私の封印していた扉は、こちら側からは開けるつもりもなく過ごしていたのですが、あさみが向こう側のかんぬきをはずすと、手もなく開き始めたのでした。

私はまだ自分の意思も相手の真意も量りかねていました。他人事ひとことのような好奇心もありましたが、心に火のようなものが灯ったのを自覚してしまいました。それは懐かしい感覚でした。正直に言えば、やはり私を強く揺さぶっていたのは、切れ長の美しい目を持つあさみが手の届く

場所に寄ってきたという事実そのものでした。あさみの真意が吟行にあれ、もしかして私への好意にあれ、いつも長方形に配置された長机の向こう岸に見ていたあさみが間近にいることを思うと、高ぶり続ける思いを自覚しないわけにはいかないのです。

胡麻ソフトクリームはおそらく十年前と同じ味でしたが、今助手席にいるのはあさみでした。食べ終えたころ、

「ちよつと大胆でしたか？」

とあさみはうつむくようにしてぼそりと言いました。

「メールをよこしたのは、Sさん以外では初めてかな」

「Sさん？」

「季語だったか字足らずについてだったか、質問されたことがあるな、確か」

九時過ぎたらよこさないようにと条件をつけてから、俳句講座の受講生には携帯のメールアドレスを教えるのです。——いっどこで俳句を作っても、次の俳句講座まで待てないような質問が生じたときだけはメールをよこして構わない。ただし、こちらも電話を離していることがあるので、すぐに返信できるとは限らないが、それでかまわなければ——と。

実際にS女史からメールが来たときは、ナイターの最終回のせっぱ詰まった場面だったこともあり、タイミングの悪さがそのままS女史への印象につながりそうになりましたが、さいわい巨人がサヨナラ勝ちしたので、なんとか穏やかなアドバイスを返信できたのです。同じ場面であさみからあのメールが届いたら、と自問すれば、同様の印象にはならないような気がしました。とりもなおさずそれは私のあさみに対する潜在していた感情の答えでもありましょう。

「Sさん、積極的に質問しますよね」

「熱心だね。向上心があるというか」

「でも句会じゃあまり選ばれないんですよね」

「分かってほしい気持ちが強すぎるのかもしれない。独りよがりと好い句は紙一重の場合もあるからね。分かってもらえなくても、まあ仕方ないか、ぐらいでいいと思うけどね」

あさみが俳句講座に参加し始めたのは、去年の春でした。新聞の俳句の投稿欄を味わっているうちに自分でも作りたくなったから、というのが参加の動機でした。一番最初に彼女が作った句は今でも覚えています。

微笑んでそのときだけは咲く桜

というものでした。言葉がまっすぐな感じがしたので、もしかしてと思いながら私は選んだのですが、名乗られて思わずうなずいてしまったのを覚えています。「そのときだけ」とあれば、「そのときでないとき」に意識が向かいます。その句の説明のときに、あさみは「今、この句を先生に選んでいただいたというようなのが、咲く、という感覚です」と言ったのでした。

海に沈む夕日が見たいと思いました。

秋田自動車道から日本海東北自動車道に入り、岩城まで南下してから日本海沿いの国道七号に乗りまた北上しました。「酒田街道」と呼ばれる海沿いの道がはるかに延びています。すでに黄金色こがねいろの陽の光になっていました。海岸線に沿ってしばらくコスモスが咲いている道がありました。あさみの横顔には、海の彼方から逆光があたっていて、鼻から形のいい唇にかけて縁取りをしたように光っています。うつすらと湿った頬やひたいを、海を眺めるような仕草で盗み見ながら、私はいろいろなことを考えるのに疲れて、ただこの官能的なドライブに身をゆだねたくなりました。

もしこんなことが知れたら俳句教室は気まづくなるだろうか、やめなくてはならないとか、

いや知らなければいいのだとか、ここ二三日堂々巡りしていた考えをほっぴり投げて、何も考えまいとしたのです。それらは、私が浸っている「今」という時間を濁らせるもののように思えたのです。

しかしなかなかそうはいきませんでした。男鹿半島への入り口で、巨大ななまはげ像が二体、御幣ごへいと包丁を振り上げて私たちを見下ろしていました。見上げて、おつきい！　と言うあさみに、でかいな！　と相づちを打ちました。なまはげが私たちだけに腕を振り上げているような気がしました。私は、スピードを緩めることなく、その足もとをすり抜けたのでした。そして、恐ろしい門番ほど、通り抜けた者にとっては心強いかもしれない、などと考えたりしていたのです。

たまには単純に「その時」を楽しむことがあってもいいのではないのでしょうか――。あさみとてさまざまなマイナスは考えただけです。さらに自分の年齢のこととか、この先のこととか。「なんだか不思議だね、こんなとこ走ってる」

私は流れる景色を眺めながら言いました。

「楽しいですね」

そのとおりでした。そこには今しばらくは覆くつがえらない確かな嬉しさがありました。

「なんでこんなことに——」

私はその揺るぎなさに安心して、つい、自分から川底を搔いて濁りをたてるようなことを口に出しました。

「私もそう思います」

あさみはシートに寄りかかったまま言いました。あさみの声が閉じられた車内に心地よく漂います。あさみの声は表情が豊かで、前を向いている私にも、微笑みながら話しているのが分かります。

「いや、吟行したいにはしたかったんだが、まさか……」

「私のせいにするんですか？」

こういうときの駆け引きもやりとりの作法も知らない私は、あけすけに言いました。

「べつに卑屈になるわけではないが、こっちは歳も歳だし、まさか——」

「吟行したいとおっしゃってたじゃありませんか」

「泊まり可、は利いたな」

「日帰りだと慌ただしいでしょう？」

——たしかにそのとおりです。この車に乗るまで私は何も尋ねなかったのです。ここまで来て理由を聞いたりするのは、責任逃れととられても仕方ありません。私はこの道に乗るまで、この道に乗ることだけを願っていたのですから。あさみの進んできた道に障害物など置かないようにしてここまで来たのです。それを今さら訊こうとするのはやはりずるさが漂います。

「先生が私を誘ったんじゃないませんか」

私は思わず左を向こうとしましたが、対向車線にダンプカーが三台ほど続いていたので首だけをわずかに回し、前方を見たまま、

「え？」

と言うだけでした。

あさみが何も答えないので、ダンプをやり過ごしてから、私はまたオレンジ色の海のほうを、あさみの横顔を視野に入れつつ、ちらと見ました。

「先生は正直ですから——。句会で私に話しかけるときの声だけは他の人とはちがうんです。もしかしてご自分では分からないでしょう？」

「……まったく分からない」

自分でも呆あきれました。言われてみればと思いました。私のここ数日の反応は、まさにあさみが見抜いていたとおりの男のものです。

「でしょう？ でも声を受け取る側は分かるんです。もしかすると敏感な人は何人か気づいてるかもしれませんけど」

浅はかな俳句講師に、沈黙してハンドルにすがっている以外、何もできようはずありません。

「でも私は、はじめて講座に出たときから、先生の話し方が好きでした」

「……話し方？」

「ええ、俳句ももちろん好きですけど、生なまの話し方が好きです」

「不思議な観点だな」

「話し方って居心地だと思っんです。私は人を好きになるといのは、話し方を好きになるとだと思っんです」

私は少し考えて素直に納得しました。自分のこれまでを思い返してみても、衝突した人や苦手な人は、みんな高飛車な言い方や言葉の抑揚やしたり顔の言い回しなど、すんなりと聞けない要素を持っていたからです。それは声の質とかではなく、確かに話しぶりのような気がしま

した。そしてそういうあさみの感受性にまた惹かれました。

「あとは先生の周囲にある空気。さつきも、あそこで胡麻ソフトクリームをふつうに食べる先生の空気みたいなのが」

「そりゃあ食いものは、食いたいときが旨いときだから——」

「そういうところ」

私は、かつて妻とも同じ道を走り、同じように胡麻ソフトクリームを食べたことは言いませんでした。病弱の妻に私は、「胡麻ソフトはここに来たときだけ食べよう」と言ったのでした。

妻はあさみのように快活な受け答えはしない性質でした。「美味しい」とは言っても、目を丸くして見せたり、満面の笑みになったりすることはありませんでした。大きな声で笑ったりはしやいだりすると、生きる燃料がその分早く減ってしまうと、牀かたどの深いところが警告していたのかもしれない。あのサーブエリアで幟のぼりを見たとき、私は妻との約束を思い出しました。ここに来たのだから私は胡麻ソフトを食べようと思ったのです。もちろん前回に来たときの意味は、「また夫婦で来たときに」という意味に相違ないのですが。妻はもういなくなってしまうましたが、胡麻ソフトを食べれば、何か答えのようなものが浮かび上がるかもしれないと思っただけです。もしかして妻の声が聞こえ、「引き返さない」とでも言われればそうするつ

もりでしたが、何も聞こえませんでした。聞こえないのも当然かもしれませんが。あさみが言うには、半分ほどの年齢のあさみに、私から懸想けそうしたというのですから。

会社に勤めるというのは可動域の決まった鎧よろいを着るようなものです。特に私のように銀行勤めであり、妻の治療費に縛られ、住宅ローンを負い、一人息子とはいえ東京の私立大学に出した身となれば、昔の潜水服のような、重い鎧の、動き方の決められた関節のとおり腕を振り、定められた歩幅で歩むしかないのでした。首を回してよそ見もできない。大股に踏み出すこともできない。けれどその可動域に従順になることによって、ひと月、一年、十年と私の家族も家も守られてきたのでした。

しかし、その鎧を脱いだ今となっては、交通違反で捕まっても始末書一枚書く義務もなければ、平日の昼間からパチンコをしても構わないのです。理屈では分かっていたのですが、退職したばかりのころはずいぶん違和感がありました。そうしてしだいに縛られていたということが繋がっていたということでもあり、そしてまた守られていたということであつたと、脇の下を風が抜けるような境遇になってしみじみ感じられてきたのでした。

私のこのドライブは、鎧を脱いだ自分の肩や脚や首や背中が自由に動かせることの証明でもありました。ということとは、「今」を生きていることの手応えそのものなものでした。かつての

私では許されなかった現実の中にいるのです。今感じている、夕日の中のあさみの横顔は、今だけしか感じられない美しさなのでした。「今」とはなんととはっきりした感覚をもたらしてくれるものでしょうか。

風、光、味、声、匂い。それらが私のなかに絶え間なく沁み入ってきていました。

チェックインしたときは夜になっていました。

あさみがインターネットで予約した宿でした。部屋は和室——ひと部屋でした。驚いたことには私たちの部屋には、海に面して露天風呂が設置されていました。

もしも妻とのドライブなら、私はすぐに畳に横になり、長時間の運転でくたびれた体を反っくりかえらせて伸ばしたでしょう。あるいはすぐに風呂に飛び込んだかもしれません。胡麻ソフトクリームはためらわず食べた私でしたが、こうして閉ざされた部屋にいと、自分が心の底ではどうすべきなのか分からなくなってきたのでした。もちろんあさみの立場や、思い切ったこれまでの行いを考えれば、この期に及んでの逡巡は許されないはずでした。けれどもあさみと初めて長い時間を過ごそうとしている自分を考えたとき、そのあさみの決意に見合うものを胸の中に持っているかと自問すれば、かなり見劣りのする欲望とか好奇心とか、そういう

ものしか見あたらないような気がしてきました。私が若ければそれも構わないでしょう。しよせん恋というのはそういう勘違いのぶつかり合いから始まるようなところがあります。その勘違いをひとつひとつ修正しながら生活することが結婚というものだったような気がするのです。

さすがに部屋の風呂にいきなり入るのは憚^{はばか}られ、私は最上階の、日本海を一望するという名物の露天風呂に行きました。あさみもその隣の女湯に入っていました。

湯に浸かりながら、立ち寄った入道崎で、老いた夫婦にカメラのシャッターを頼まれたときのことを思い出していました。

部屋に戻ると夕食が用意されていました。あさみも私も浴衣姿でした。湯上がりで髪をひつめに結ったあさみの襟足は私をどきりとさせました。が、私が二杯目のビールを飲み干したコップを見て、あさみが言いました。

「逃げるつもりですね」

「えっ？」

「先生がそんな飲み方するの初めて見ました」

もしも私が逃げているとすれば、それはあさみから逃げているのもこの夜から逃げている

のでもなく、考えることから逃げていたのでした。その結果酔いつぶれたとしても、それは拒否ではなく留保なのでしたが、あさみにそういう身勝手な理屈が通ずるかどうかは分かりません。

退職して自由になったとはいうものの、長年私の心身を制御してきた鎧よろいは、それを脱ぎ捨てた後でも、かつての鎧の関節が許さぬ角度のものに腕を伸ばそうとすると、腕を押さえつけようとしているかのようでもありました。さつき展望露天風呂で考えたことも、つまるところ私の過去が今の私に作用して引き出された考えなのですから、長年過ごした銀行員の生活がその柱となっており、あとは亡くなった妻との生活や趣味の俳句で触れた世界が投影されたものにちがいないのでした。

象を調教するときには、捕まえてきた子ども象をびくともしない竹につなぐという話を聞いたことがあります。いくら抵抗してもムダだといったん思い知ると、象は大人になってからも、か細い竹につながれただけの我が身にもかかわらず、すでに逃げられないものと決めこんで、逃げようとはしなくなるのだとか。

人もそのとおりで、意識はせずとも理屈では説明できない鎖に巻かれているのかもしれない。

「懇親会でも忘年会でも、先生はビール一杯で真っ赤になってるじゃありませんか。すぐ部屋の隅で寝てしまうし」

あさみの言うとおりでした。

慥かに私は晩酌もしないし、夜、飲みに出ることもありません。勤め始めたころにいちばん辛かったのは、仕事の関係で酒を飲む場面でした。とにかく弱いのです。アルコールハラスメントなどという言葉もない時代です。むしろ一息に飲ませられたりする場面のほうが多かったと思います。一度救急車で運ばれたことがあります。それが銀行内で知れわたり、命がけで免罪符を手に入れた形になったのでした。

顔が火照り、鼓動が早くなりました。

「最初の俳句に一目惚れしたんだな、きつと」

頭の中が霽もやのようなもので覆われだしました。ですがあさみの俳句に関する部分だけ、そこだけ晴れているように鮮やかによみがえってきました。

「ほかの季節はほとんど見向きもされない桜が、春になると屈託くつたくなく微笑みながら咲く——すなおないいい句だった」

「講評のときもそう言いました。でも私は選えばれたことより通とじたことが嬉しかったんです。

思い切って参加してほんとはよかったと思いました」

「Sさんも取ったんじゃないかな？」

「そうです。Sさん、気持ちをくみとろう、くみとろうとしてくれるからありがたいです」

「深読みしてくれるよね、たまにお門違いのほうに走ることもあるけどね」

「ひとつの俳句にちゃんとストーリーを作ってくれるんです」

「ストーリー……か」

短い沈黙の後、あさみは俳句講座に参加した経緯いきさつを話し始めました。

大学を卒業し東京のテレビ局に勤め、仕事に追われるうちに、自分の言葉がただの社交や用件を伝えるだけの道具になり、自分の気持ちや理不尽に対する憤りを出す場面がどこにもなかった。そうして言葉が自分から離れて、どんどん干からびていくのに耐えられなくなった。

勤めをやめてから郷里に帰り、ほぼ半年間引きこもりのような状態だったが、新聞の俳句欄だけが抵抗なく読めた。自分なりに考えてみたところ、その人だけが紡ぎ出した言葉がそこにあるからだと思に至った。

そうしてなんとか地元のカールテレビに再就職し、さらに半年後に俳句講座に参加し始めたとのことでした。

そのいわばデビューのような句が、「桜」の句だったのだそうです。といってもあの句は引きこもっていたときにこしらえてノートに書き記していたもので、句に自分が入っているから受け止めてもらえたことが何よりも嬉しかった、と言いました。

そして私の意識がほぼ霧に包まれてしまったころに、言葉と気持ちのすれ違いを繰り返した東京での恋の話があつたかもしれません。

夜中に目が覚めました。隣の床に、あさみがこちらを向いてあどけない寝顔で眠っていました。入り口の灯が、細く開けられた襖の間から洩れていました。私はそっと立ち上がり、タオルを持ち忍び足で部屋の露天風呂の戸を開けました。

手前が簀の子になっていて、奥が岩風呂になっています。部屋の中のかすかな灯と、宿を控えめにライトアップしている光で、ほんのりとあたりが見えます。湯はぬるく、奥へ数歩あるくと岩のそちら側に低い竹垣が組み込まれ、その格子の向こうに、イカ釣りの漁り火なのか遠く白い光が水平線に並んで輝いていました。

部屋の灯が揺れたので振り返ると、人影がガラス戸に映りました。

私は湯に沈み、また小さな竹垣を通して、じっと漁り火を見ていました。

静かにドアが開き、簀の子がきしみました。

私は耳で、あさみの姿を感じていました。

汲まれた湯が、跳ねる音がしました。

湯に躰を沈めるやわらかな気配がありました。

お湯が少しかさを増したようでした。

吐息が、すぐ後ろで聞こえました。

「ずいぶん、朝早いですね」

「昔から酔いが醒めかけると目も覚める」

「年のせいじゃなく——」

「若いときから」

私は自分の頭越しに声を届けるようにのけぞって言いました。

「私は時間をもつたいなくて——起きました」

私は首を回しました。ぼんやりとあさみの顔が湯に浮いていました。

「時間をもつたいない？」

「それが俳句の芯にあると言ったのは先生ですよ。季節のいとしさがいのちのいとしさだ、つて」

「ああ」

講座で、ふとしたはずみに自分の考えを口にしたくなる場合があります。

どうして歳とともに俳句に寄ってくる人が増えるのか。そんなことを考えていて行きついたところがあります。

若いときには、この先何度も桜が見られると思っておざなりに桜を見ているものです。それが少しずつ変わってくる。親や友人がこの世から去るたびに、生きていることのおかげがえのなさが身に沁みるようになってくる。そして命が有限であることがひしひしと迫ってくる。

ことに妻を亡くしたあとは、この春の桜が妻にとっては最後の桜だったのだ、妻は今年も八幡平の紅葉を見るつもりだったのに、去年の紅葉が見納めになってしまったのだ、と無念さばかりがこみ上げてくるのでした。人の命と自然の移り変わりは、一緒のときを過ごしているのです。

「入道崎で、ベソかいてましたね」

——やはりあさみは気づいていたのです。

私はまた沖の漁り火に目を向けました。

ゆらりとお湯が動き、あさみの躰が私の右側に移りました。

遠い光の帯を二人で見つめました。

入道崎で、八十手前ぐらいの老夫婦に、シャッターを押してくれませんか、と頼まれたのでした。私はカメラを受け取りました。カメラはフィルムカメラでした。縞模様の灯台を背にして、車椅子の妻の肩に手を置き、夕日の中で少しおどけた顔をした夫をファインダーの向こうに見た刹那せつな、不意に私は嗚咽おとづに襲われました。震える唇とこみ上げる涙に戸惑いながら「撮りますよー、イチニノサン！」と大きな声でごまかしながら、シャッターを押したのです。フラッシュが光りました。現像してみなければ写っているかどうか分からないカメラです。もう一枚撮りましょう！と私は大きな声で言い、再び「行きますよー、イチニノサン！」と、シャッターを切りました。

旅先で、何だか元気のいい中年男がシャッターを押してくれたっけ。

老夫婦の貴重な時間に、わずかでも明るさを添える役柄――。

「デジカメじゃなかったんですね」

「そう、出来上がって受け取るまで、どんな写真なのか分からないカメラ――懐かしいカメラだった」

目を瞑つむってしまっているのか、満面の笑みで写っているのか、それは現像してプリントして

みなければ分からないけれど、少なくともカメラを向けたそのときは最高の笑顔でレンズを見つめていました。帰ってから二人で笑い合いながら眺めるその写真は、いつかその一人だけが、岬の広さと夕日を浴びた縞模様の灯台を思い出しながら、見つめることになる——おそらくは涙とともに。さらに、かつて笑い合った二人は去り、いつか写真だけが残される。けれども生きていたその時間を切り取った写真はまぎれもなく、幸せな命の証拠になる。

俳句も短歌もそうです。自分の見つめた光景が、自分だけの言葉で切り取られ、自分だけの額縁に飾られるのです。それがその季節を生きた何よりの証になるのです。

あさみが腕を泳がせたのか、湯の面おもてがわずかに波立ちました。腕の動きをなぞるようにか細く湯が鳴りました。その音はかすかな虫の音のようにも思われました。

命あるものが、めぐる季節を味わう回数には限りがある。それは忘れるわけにはいかないものです。だから巡り来る季節が愛しくなり、昔から人は、いまある季節を味わいたい、残したい、歌いたいと思ったのでしょうか。

入道崎で撮った写真——あのご亭主がおどけた顔をした写真も、長く一緒に生きた夫婦の絶唱にちがいません。

「妻のことを少し話していいかな」

私は、まばゆい水平線の光の帯を見つめたまま言いました。

「……お聞きしたいです、ぜひ」

そう言ってあさみは両腕を前方に伸ばしました。まるでるか沖の光をすくいとるかのよう
に。

そのとき、竹垣の向こう側から、きりぎりすの鳴いているのが、私の耳にはつきりと聞こえ
てきました。

入道崎恋歌

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

夕暮れの水面を漕いでゆく

このたびは素晴らしい賞をありがとうございます。ありがとうございました。

太平洋側に暮らす者にとって「海」は日の昇るところです。

夕日は山の端に少しづつ沈んでいきます。夕暮れ時はただでさえもの寂しいのに、日が海に沈んでゆく景色はそれだけでドラマになりそうな気がします。日本海に沈む夕日に憧れて油絵を描いたこともあります。季節にかかわらず、出向くたびに慌ただしくシャッターも押します。そこに生まれそうなストーリーが断片的に浮かんできたりします。

私のパソコンの中には朝日も夕日も見られずに引きこもつ



表彰式での畠山さん

畠山政文

ている小説が多くあります。今回の作品は中でも希有な恋愛小説（のつもり）を大幅に書きかえたものです。

頭の中は自由ですから、私はこれを映画化しながら書いていました。主演は役所広司か渡辺謙、平田満あたりも味があるかもしれない。あさみは綾瀬はるかか地元の顔ということで壇蜜、俳句教室の面々は内館牧子先生を筆頭に地元の方々……。など。

失礼しました。このような妄想も推進力とし、いろいろ調整しながら書き終えました。受賞の報せをいただいてなによりも嬉しかったことは、その道のプロの先生方にまで読んでいただきましたということ。絵や音楽とちがって文章は読んでもらえなくては何も始まりません。目に飛び込んでくるものでもなく、鳴り続けるものでもないの、意識的に文章の水面みづうを漕いでもらわなくてはなりません。となればできれば漕ぐ（読み進める）のが楽しい、あるいは知らずに漕いでいた、とさせる何か、がそこにはありません。何かは文章そのものの質であり、ストーリー展開であったり、ある種の問いであったりするのでしょう。

ともかくも最終審査までに、お読みになるそれぞれの方々大切な時間を割いていただきました。本当にありがとうございます。私の作品の中にその何かしらが少しなりともあって、読み進めるたしになったのなら本望です。

第5回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

神代じんだい駅えきから

渡辺礼司・著

神代駅から

私は昨年の秋に膝を痛めた。痛めるとすぐに冬になり、雪になり、久しくウォーキングを休んでいた。膝の痛みもどうやら治まり、気が付くと春。気持ちの良い日差しなので足試しをやってみようと外に出た。どっちに行こうかハタと考えた。瞬時に思いついたのが神代駅内の連絡橋だった。私の膝は、平地はもうほとんど大丈夫だが、階段の上り下りで苦勞していた。膝を支える筋肉が衰えている。リハビリにはあの階段がよさそうだと思った。

私は数年前に神代駅の近くに引越していたが、駅には一度も行っていない。日常の移動はほとんど車だし、たまに上京するときには新幹線なので角館駅を利用する。神代駅は私の心の駅ではあるが、今は全く利用していない過去の駅であったのである。

神代駅はベンチを二つだけ置いた「待合室」だけのこじんまりとした無人駅になっていた。改札を勝手に通り抜け、上りのホームから連絡橋を上る。階段をゆっくり数えながら上るとちようど三十段あった。上り切った時、突然、「新幹線が通過します、ご注意ください」というアナウンスの流れて驚いた。私だけしかいない駅にスピーカーの大きな声が響く。やがてゴーツという音がして、こまち号が私の股の下を大曲方面へと通過していった。私はまた三十段を下りて、下り方面のホームに出た。

田んぼの中にまっすぐの一本道が見える。駅裏に小さな広場があり、そこからその細い一本

道は伸びている。ホームからその駅裏広場に下りるための六、七段のコンクリートの階段があった。私は椅子代わりに階段に腰を下ろし、一休みすることにした。息が切れていた。膝をさすりながら、神代の田園風景を眺める。一本道の両脇には、もう誰も採らないふきのとう（このあたりでは「ぼつきゃ」という）があちこちに黄色い顔をのぞかせている。抱返り溪谷の山（小影山）が近くに見える。そうだ、ここから見る景色こそが私の神代での生活の原風景なのだ。私は半世紀以上前のあの日の事を思い出していた。

私がこの田沢湖線神代駅に初めて降り立ったのは、昭和四十一年四月の事である。この神代に根拠地を置くプロの劇団「W座」に入座するためだった。

私は九州の福岡市で生まれた。父は市内で工務店を経営していたが、私が小学校三年生の時に倒産してしまった。持ち家や作業場をすべて売り払い、家族は逃げるように母の故郷の熊本市に移転した。熊本ではどん底の貧乏生活だった。父は中学生の私に「このままでは、お前を高校に行かせられんかもしれない」と言った。近所の人から、「東京の親類が経営している販売店で新聞配達をやらないか。頑張れば高校、大学まで行けるよ」という話が私の家族に持ち込まれた。私は躊躇せず東京行きを決めた。このまま熊本にいても希望がもてない。東京に行けば何か新しい世界が開けそうな気がした。そして中学二年生の春休みに一人で上京した。世

田谷区の新聞販売店に住み込み、中学校の残り一年と高校の三年間をそこから通った。

高校三年生になると大学進学はあきらめた。といって働きたいと思う仕事もなかった。そんな時に上野の文化会館でW座の公演を観たのだ。衝撃を受けた。私はこの劇団に入りたい、この人たちと一緒に舞台上に立ちたいと強く思った。劇団の本拠地は秋田の相当な田舎だと聞いていたが全く気にすることはなかった。よく言えば「見切るのが早く」悪く言えば「飽きるのも早い」性格の私は、東京はもういいと思っていた。むしろ見たことのない雪国の暮らしに憧れを感じていた。

入座が決まり、東京から、夜行で十数時間かけてたどりついた田沢湖町神代は想像以上に田舎であった。その頃、田沢湖線は「生保内線」と呼ばれていた。ふざけて「あぶない線」と呼ぶ人もいた。劇団から神代駅に着いたら電話をするように、と言われていたので駅舎を出た。右手に公衆電話ボックスがあった。入ってみて仰天した。黒い手廻し式の電話機（正式には何と呼ぶのか）が鎮座していたのだ。ニュース映画かなんかで見たことのあるあの電話だ。使い方が分からなかったが、とにかく闇雲にハンドルを廻してみた。すると「ハイ、どこにつなぎますか？」と女の人の声が聞こえ「W座ですね、十円入れて下さい」と案内された。受話器を置きながら、私は未知の国に足を踏み込んだような気がしていた。面白いことが始まりそうだ

ぞと興奮していた。迎えに来てくれた同期の研究生達と一緒にあの一本道をW座に向かつて歩いて行った。皆、私と同じ十八歳の若者たちであった。

あの頃、神代の人達は電車やジーゼルや、とにかくレールの上を走る列車を何でもかんでも「汽車」と呼んだ。そして吹雪の時などには「汽車、歩あってらか？」と言った。汽車が歩く、という言い方も何やらおかしい。ミニとはいえ新幹線が走る現在ではいくらなんでも「歩く」はないだろうと思うのだが、神代の少なくとも年配の人達は「こまち、歩あってらか」と今でも絶対そう言うのではないかと私は確信している。

さらに面白い体験がある。角館町に買い物に行こうとした時だ。発車時刻になっても「汽車」が動かないので車窓からふと外を見ると、田んぼの一本道をじいさんが手を振りながら走ってくる。声は聞こえないが「待つてけれー」と言った風だ。車掌が早く、早くと手招きしているが、じいさんの足は遅いし、まだ駅までは遠い。田んぼの一本道は丸見えなので、気が付きませんでしたと無慈悲に発車させるわけにもいかない。乗客は？ と見ると知らん顔をしている。発車が遅れて怒るわけでもなく、じいさん頑張れと応援するわけでもない。ああ、この人たちにはこの風景も日常の事なんだ、珍しがっているのは自分だけなんだと思った。

後日、神代駅近くの知人にその話をしたら「俺だば駅が近いから、あぶねえ時は『すぐ行く

から、待ってれ』と駅長サ電話したっけ」と笑っていた。もう、こうなると国鉄さんが本当に気の毒になる。「神代衆は公共の鉄道を何だと思っっているんだ」と、突っ込みを入れた私もつい笑ってしまったが。

これは、神代の人達だけの話ではなかった。角館駅から二つ先に「羽後長野」という駅がある。大曲に行くとき、ホームに立つ看板が目飛び込んできた。そこには「列車は定刻に発車します。必ず定時までには駅においで下さい。駅長」と書いてあった。その看板は臨時の簡単な物ではなく、がっしりした立派な造りで威厳を持って立っていた。私はここにも「まってけれー」じいさんがいるんだなと思った。ということは、この田沢湖線沿線のあちこちの駅で「まってけれー」をやっているのではないか。それを想像すると可笑しくなって、私は一人でニヤニヤしながら看板を見ていた。

秋田に来て三年ほどたった春の頃、仕事で上京した。上野駅を降りて歩き出したときにあれっ、と思った。みな歩くのがやたらと早い。一時間に一本しか来ない田沢湖線と違い、山手線は二、三分おきに来る。なんであんなにムキになつて、今にも動き出しそうな電車に駆け込むのだろうか。何か得体のしれないものに追い立てられているようにさえ見えた。

わずか三年ばかりで、私はすっかり田舎のゆったり人間になっていたのだ。東京の人は電車

の発車時刻に間に合わせようと必死に走る。チャップリン映画「モダンタイムス」のベルトコンベアーのシーンを思い出した。汽車を悠然と待たせる田舎の方がよほど人間中心主義ではないか。若かった私はその時結構まじめにそう考えた。

やがて国鉄はJRとなり、田沢湖線も時間を厳守するようになっていった。羽後長野のあの看板はなくなり、まっけてれーのじいさんはいつの間にかいなくなった。

そうだ、あの時も東京から戻ると、私はこの場所で抱返りの小影山を眺めたのだ。シエークスピアのマクベス、魔女の予言「山が動く」がそこにあつた。山がこちらに動いている。演劇青年の私はとても感動していた。わずか数日の間に、緑の山が、ググーッとこちらに迫ってくる。山が膨らむということはこういう事か。東京の雑踏に疲れて帰ってきた私は、山に向かって大きな深呼吸をしたのだつた。

私はすっかり神代駅のあの階段が気に入つた。ウォーキングのコースに入れ、時々駅に行くようになった。そしてあの「回顧の階段」に座り、田園風景を眺めながらしばしの間、私は私の過去を散歩する。

昔、W座の公演で全国に出かける時には、何回も、何回もあの一本道を駅まで歩いた。冬、馬の背になった雪道は、大きな荷物を持って歩くと革靴がツルツルと滑って難儀した。やがて

W座にも移動用のバスが導入され、あの一本道を歩くことも少なくなっていた。

駅裏広場から見事に真つすぐに県道まで伸びているこの一本道の事を、私の昔からの友人（私より年上で生粋の神代っ子）のMさんが教えてくれた。

Mさんが子供の頃、今は更地になっているこの駅裏の広場は、「天然秋田杉」の貯木場だったそうだ。この貯木場から軌道が敷かれ、抱返り溪谷の奥の方の伐採地までつながっていたという。（神代森林軌道と呼ばれた）。あの真つすぐな一本道は、秋田杉を運ぶトロッコ道だったのだ。木を運ぶ営林署の人は朝トロッコを押し抱返りの山に入り、夕方になると木を満載してこの貯木場に帰ってくる。子供だったMさんたち悪ガキ仲間、貯木場においてあるトロッコを押し遊んでいたそうだ。「面白くて、抱返りの入り口近くまで行ったよ」とMさんは言う。夕方になると営林署の人が戻ってくる。その時間になるとあわてて貯木場にトロッコを戻し、何食わぬ顔をしていたというのだ。「あの頃は何でも遊び道具にしていたなあ」とMさんは少年時代を懐かしんでそういった。

私はトロッコを近くで見たこともなく、もちろん触ったこともない。Mさんの話を聞きながら中学校の教科書に載っていた芥川龍之介の「トロッコ」という短編小説を思い出していた。主人公の少年は、暗くなつて、心細くなつてきた頃「俺らはこっち泊まりだ。おめえは帰りな」

と工夫たちに突き放され、泣くのをこらえながらトロッコ道を走って家に帰った。そして家の前に着いてワーツと号泣するのだ。小さいとき似たような体験をした私は読んで共感し、大いに感動した。芥川龍之介の作品を捕まえて「これは名作だぞ、すごいぞ」と偉そうに弟に熱弁した記憶が残っている。

やがて抱返りの天然杉は涸渇し、伐採作業は終わり、いつの間にかトロッコは無くなったとMさんは言った。(昭和三十六年に廃止されたようだ)。私が神代に来た頃は、抱返り溪谷の「神の岩橋」から先だけはまだトロッコの線路だけが残っていた。今はその軌道も全て取り払われ、観光客が歩く遊歩道になっている。

私は秋田に来て五十三年目に突入した。この七月には七十一歳になった。そして親不孝者の私はある重大なことを思い出した。

「高校に行かせられんかもしれない」と情けなさそうに言っていた父が、交通事故であっけなく亡くなったのだ。それが五十三年前の事であった。私がW座に入って半年後の十一月、「チチ、キトク、スグカエレ」の電報を夜遅く受け取り、翌早朝に神代駅を出た。盛岡駅、東京駅と列車を乗り継ぎ、熊本駅に一日半かけてたどり着いた。熊本大学病院に駆け込むと、父は意識不明のまま私の到着を待っていてくれたが、やがて力尽き、その半日後に逝ってしまった。

今の私より二十五歳も若い四十六歳の旅立ちであった。

そして私は気が付いた。あの時、私は大曲經由奥羽線ではなく、盛岡經由東北線で熊本へ行っている。つまり、その時すでに生保内線は田沢湖線に変わっていたという事だ。調べてみると、その年の十月に田沢湖線が開通していた。父の死の一か月前の事だ。私は生保内線で時代にやって来て、半年後、神代から今度は田沢湖線で熊本に帰ったことになる。私の秋田の五十三年は、そのまま田沢湖線の歴史とびったり重なっていたのである。

最近知り合った仙北市出身のA氏が、東京や海外で五十年の間活躍して、故郷仙北市に戻ってきたら「よそ者扱いされた」と憤慨しておられた。もし私が、これから熊本に戻ったとしたらやっぱりA氏のようにぼやくことになるのであろうか。

もう三十年も前になるが、私は母の遺骨を抱いて九州に帰った。父の墓がある宮崎市で納骨をすませ、熊本市に立ち寄ってから秋田に戻ることにした。ホテルから妻と娘は熊本城を見物に行き、私は懐かしの母校へ思い出探しに出かけた。

熊本電鉄の「黒髪町くろかみまち」という駅のホームに立つとR中学校が見える、はずだったが見えない。

田んぼの中に金網に囲まれた広いグラウンドがあり、夏目漱石が「山道を登りながら考えた」という金峰山を背景にして見えるはずのあの母校が見えない。駅の周りはびっしりと住宅がひし

めき合っていたのだ。不安になり駅の人に「R中、この駅ですよね」と確かめたほどだ。中学校はあった。だがそれは私の知らない、新しい都会の中学校だった。校門から恐る恐る中をのぞくと、女子のセーラー服の色も、紺は紺だがやや明るい色調の物に変わっているように見えた。私は不審者扱いされてはあまりにも悲しいので、そそくさとR中から離れた。それ以来、私は熊本に行っていない。

五十年の時を経て私が今もし熊本に帰郷したとして、A氏のように「よそ者」扱いされるのだろうか。いや、浦島太郎状態の七十代の私には、大方の人が関心すら寄せてくれないだろう。私はよそ者どころか「過去者」なのである。私がかつて熊本で生きていたという痕跡すら今は無い。私は確実に疎外感に打ちのめされ自滅するに違いないと思う。

以前から私は、フーテンの寅さんみたいに「生まれも育ちも葛飾柴又です」ときっぱり言えたら気分がいいだろうに、と思っていた。あちこち転々と歩きまわっていても、寅さんには柴又という故郷がある。私にはそうきっぱり言える絶対的な故郷はない。根無し草のようで、心もとなく、いつももどかしい思いがあった。

しかし、よく考えてみなよと、もう一人の自分の言う声が聞こえてきた。飽きっぽいお前さんが、どうしてこんなに長い間秋田で暮らし続けてきたのか。昔、閉口していたハタハタ寿^ず

しを今は旨いと食っているだろう。ばあちゃんの「あや、す（し）かたねえこと」という秋田弁の響きを今は懐かしく感じているだろう。お前さんの中にはもう「秋田」がすっかり息づいている。ここが、本物の故郷になっているという事なんだ。お前さんは秋田が面白くて大好きなんだよ。

私はもう一人の自分の声に同意した。そうだ、そのとおりだ。私は秋田が好きだ。そして「俺の故郷は秋田だ」と声に出してみた。言葉にして口に出すと何か吹っ切れた感じがした。スツキリして晴れやかな気分になった。

それにしても、神代駅下り線ホームから見える小影山、その後ろの白岩岳しらいわだけを包む和賀山系の山々、そして広がる田園風景は昔のままだ。左手、県道から国道四六号線にぶつかる手前の、田沢湖線を跨ぐ大きな跨線橋、ここだけは近代を感じさせるが、あとは昔とさほど変わっていない。

長い、長い旅をしてきて、ようやく故郷にたどり着いた旅人のように、私は神代駅下りホームから広がる秋田の風景を眺め続けていた。

神代駅から

楽しんで書き、時には

私は昔から「競う」ことが苦手だった。小学校の運動会の徒競走で、コーナーで団子状になると「引いて」しまうのだ。足が遅いということもあるが、人を押しつけて「前に出る」という気迫や闘争心が乏しいのだろう。気が付くとビリから二番目くらいでゴールしている。「競争苦手意識」が小学生の頃には立派に形成されていた。

この頃、私の書いた『となりのタミちゃん』という作文が学校の文集に載ったことがあった。覚えてたの「ミリバール」という言葉を使い、台風の大雨のように大泣きする女の子の



表彰式での渡辺さん

渡
辺
礼
司

事を書いた。得意になって母に読ませると「お隣さんには絶対見せちゃいかんよ」と釘を刺された。私はその子に愛着をもって書いたつもりだったので不満だった。それでも六十年も前の事をはっきり覚えているのは、自分の書いたものが評価され、活字化されたという喜びが、その時相当大きかったということだろう。

今回、初挑戦で「文学賞」を頂いた。謙虚でもなんでもなく、本当に驚いた。ワープロを覚えてから随筆らしきものを時々書いてはいたが、人様に見せることはほとんどなかった。書くのが楽しいのだ。評価を気にせず、気ままに自分で楽しんで書けばいい。私の死後、後片付けの娘や孫が「へー、じいちゃん、こんな事考えていたんだ」と面白がってくればそれでいい。読んだ後、抹消するか残しておくかは娘や孫次第とする。まあ、あいつらは抹消するに違いないが。

東京にいるその娘からメールがきた。運動会の徒競走で小学生の孫娘がなんと一等賞になったというのだ。「褒めてやれ、褒めてやれ」私は即、返信した。子供の頃に評価されたことは一生残る。私は競うことは今でも苦手だが、今回挑戦する面白さは知った。楽しんで書き、時には挑戦する余裕の生き方。どうだ、職業作家さん達、羨ましいだろう。

第5回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

夢のあと

堀川 茂進・著

夢
の
あ
と

生まれ故郷を離れて、三十年あまりになる。離れたとは言っても車で二時間ほどの町に住むのだが、年を経るごとに遠く離れたという気持ちが増してきて、それは望郷の念からだろうか、ふと恋しくなるときがある。私のふるさとは、駒ヶ岳が見下ろす北へと続く道を、田沢湖の駅から十キロほど入った山あいの村である。

ふるさとの田沢は、北は前郷沢まへごうざわの源となる荷葉岳かようや、南は峠を越えれば田沢湖へ出る山々に抱かれ、八幡平の南麓から流れる玉川に沿って開けた小さな村である。かつては、小学校や中学校、高校の定時制分校などもあって、子供たちは少ない同級生と中学までを過ごし、卒業すると就職や進学、村を出たりそのまま残ったりした。長男だった私は下宿しながら高校生活を送ったのだが、やがて大学受験に失敗し、村に戻って浪人することになった。昭和五十年を過ぎたあたりの、随分、昔の話である。だが、その春の出来事、父と登った山のことは今でも忘れられない。先年、父が亡くなり、私はその思い出をもとに小説を書こうと思いついた。奇しくも、当時、浪人生活が始まった三月のことだった。

村の歴史は古く、薪が燃料として貴重だった時代に藩の御薪山おたきぎやまとして薪を納め、人里離れた溪谷には藩主の御用湯があった。その昔は田沢の湯とも呼ばれた、乳頭温泉郷に湧く鶴の湯である。そんな山あいの村で、私の先祖は山からミズナラなどのお薪木たきぎを切り出す仕事をしてい

たようだ。うちの屋号が、薪を納めた者として記録に見ることができ。物心ついた頃、家では同じようなことをして、人を雇って玉川の手々へ分け入り、木を切り出して。世が世であれば、私もそれを生業なりわいとしていたのかもしれないが、祖父が亡くなり、中学へあがる頃には父もその家業をやめて、そんなわけで父は、玉川や田沢の山に明るかった。

その春、四月も終わりに近づいたある日、父は、このひと月、農作業を手伝いながらも沈みがちな息子を気にかけてか、岩魚釣りに行こうと誘った。私はいつの頃からか岩魚釣りに魅せられ、中学からは村に流れる前郷沢へ足繁く通っていた。

「前郷沢でねぐ、尻高しりたかの沢だ。尻高サ、行ってみるべ」

意外にも父が口にしたのは、鎧畑よろいばたダムを過ぎ、小野草おのくさを越えてから北東に入る尻高という所だった。そのふもとの辺りには祖父が飯場はんばに使った小屋があり、幼い時分に泊まった記憶がある。だが、尻高の山は初めてで、私は興味をそそられた。

「オシヨブツサマ(お諸仏様)、聞いだごあるべ? 峰サ登って、それ見でがら、沢、下りるべ」
そう続けたのでそれが目的なのかとも思ったが、初めての沢は魅力的で、言われるままに出来ることにした。

その頃、玉川ダムはまだなく、道路も今のようには整っていないで、八幡平や玉川温泉へ向

かう田舎の道は、途中、鎧畑のダム湖に沿って蛇行しながら、いくつもの短いトンネルを抜けて玉川の集落へ着いた。私の集落は村でも下に位置しもしていたから、玉川までは当時の道で二十キロ近くはあったと思う。尻高沢林道の入口はその道のりの半ば過ぎにあり、車がなかったので近所の知り合いにそこまで運んでもらった。

「まず、ネボトケサマ(寝仏様)、見で行ぐべ」

林道に入るとすぐ、父はそう言って右手の杉林に入って行き、そこには道などなかったから、私はわずかな不安を覚えながら後に続いた。静寂の中に漂う、里とは違った朝の空気が心地よかった。

足下の草が藪になる前の山は歩きやすく、きつくはない斜面をわずかに登ってしばらく歩くと、目をみはる巨岩が現れた。横たわるといふ表現が似合うその岩は、身の丈三間ほどはある巨大な地蔵が寝ているようにも見える。

「昔ナ、オシヨブツサマ参りサ来た僧達、こごで、ひと休みした下。その中のひとりナ、寝でしまつて、置いて行がれで、このネボトケサマサなつたんだド」

と、昔語りでもするように父は教えてくれた。杉林なのに傍には赤松がそびえ、古びた蠟燭立てなどもあつたりして、その一角だけ違った空気に包まれているように思える。私は神妙な

心持ちでポケットカメラにその空気を収め、促す父に従い林道へ引き返した。

しばらく林道を進んでから、沢を渡って鳩峯神社を目指した。単調な沢音に重なる鳥のさえずりが長閑さを感じさせる。思えば、父とこうして歩くのは初めてのことで、父は何を話すでもなく、ただ、私にいつとき現実の世界を忘れさせてやろうという心が見えて、玉川の山の話や祖父との山仕事の話をぼつりぼつりとしてくれた。私はときおり言葉を挟むだけで、だが、そうした父との時間がまんざらでもなくなっていた。

鳩峯の社と、そこから目指すお諸仏様という奇岩群の謂われを父が語ることはなかったが、小さなその神社よりも私の記憶に残ったのは森の中に湧く泉の話である。父はそこへ連れて行き、沼のように大きな泉は神社に近い辺りだったと思うが、木漏れ日が水面を神秘的に映す泉は、どこかに主でも潜んでいそうな印象を与えた。魚がいるのか尋ねると、

「……昔、鯉、放したごどあってナ。増やそうど思つて。んだどもその後、見ねがら、死んだべナ」

父の答えは、好奇心をくすぐるものだった。もし生き延びていれば、大分大きくなっているはずだ。試しに釣糸を垂らしてみたくなりそう言うと言つと、釣れるわけがないと一蹴され諦めたが、今でも、鯉がいたのではないかと思つている。忘れられない泉の話である。

鳩峯神社から奥へ登るお諸仏様への道のりは、幾度も訪れたことのある父でなければわからないものだった。幸いなことに、まだ春浅い山は所々に雪はあっても歩きづらくはなかったが、昼までには到着し、握り飯で腹ごしらえをして下山する予定だから、腰を下ろして給水するところを歩きながら口にし、わずかに立ち止まって話すくらいの休憩で峰を目指した。そんな中でも父の話は面白く、ふるさとの山の話は、なぜか、その時の私を力づけてくれた気がする。ただそれは、大分、時が流れてから思ったことである。

傾斜がきつめに感じてきて、目指すものが近づいているような予感がしていた。お諸仏様がどんなものか、父は多くを語らなかつたが、晴天なのに、囲まれた切り立つ岩やブナの木々で仄暗くなった場所で、これが門石だと巨大な岩を指さされた時に父の考えを悟った。いらぬ説明が、感動を薄れさせてしまうと思ったのだろう。だが、聖域に入ったことを知らせる、ひとつはピラミッドを思わせる不思議な形の巨岩は、もし話を聞いていたにしても十分に驚かせるだけのものだった。

「この門石がら、オシヨブツサマサ、上がって行くんだ」

私たちは門石に乗ったり、その横に並んだりして写真を撮ってから、切り立つ岩を見上げながらその足下を登った。明らかにそこは、これまで歩いてきた山肌と違う。昂奮こぶちが高まり、列

なる岩が、見ようによつては立像か大きな人面にも見える所まで来たときには、昂奮は驚きに変わっていた。父の口から、ここがお諸仏様だ、という声が聞こえた。

「見でみれ」

父が指さした人面岩に目をやると、足下や窪みに硬貨が置いてあり、ここがどんな場所か、訪れる者が何のために来るのかを物語っている。神秘的に列なる岩を眺めながら、ここまでお参りに来た人々に想いを馳せ、何とも言えない不思議な気分かられた。そんな私に父は小銭をよこし、自分の一枚をお諸仏様に供えた。私たちは手を合わせて拜んだ。何となく父の願い事がわかった気がして、私はそれまでにないくらい父を近くに感じた。ブナの木々が日差しを柔らかく遮り、かすかな微風が流れ、父は、私が目を開けてもまだ手を合わせていた。

握り飯を平らげ、ブナの間から遙か遠くに望む山並みを眺めていると、父が腰から抜いた鉋でブナの木に何やら彫りだした。

「おら達の、名前彫って行くべ」

器用に鉋を操り、ふたりの名前を彫りながら、いつか、この木を見に来ようと続けた。真剣な面持ちで木肌に向かう姿が、今でも目に浮かんでくる。子供の頃、父が遊んでくれた記憶は乏しく、今日のような過ごし方はしたこともない。私には、父の言葉が約束のように聞こえて

いた。心の中にうれしさが動き、私はそれを隠しながら、玉川を見てくると言い残してお諸仏様の左手から尾根に登った。

登りきった所のその上には結構な広さの雪があり、周りの景色を眺めながらそこまで足を運んだ。雪まで来ると、北側の谷間の裾に、玉川の上流に架かる岩の目の赤い橋が小さく映り、その橋を渡った岩の目沢の辺りには、かつて飯場に使った小屋があるはずで、幼い妹を連れ、母が炊事のためにいつとき泊まったことがある。ふと思いついて出されて、淋しかった記憶が甦った。父が家業に見切りをつけ、やがてやめてしまったのはそれから間もなくのことだった。その頃から、私は心のどこかで父を嫌うようになっていた。

雪には足跡も残っていたし、そのまま戻ればよかったものをわずかな冒険心が心に動いて、お諸仏様の右手から下りたつもりが全く違う場所に立っていた。私は、そこがどこかも知れない山道に下りてしまった。それでもまだ安易に考え、方角的には下へ進めば戻れるはずだと大分歩いたため、すでに引き返せない距離まで来ている。恐怖心が湧いてきて、だが意思を無視して足が動き、進むにつれて恐怖心は膨らみ、とうとう耐えられなくなって声をあげようとした、その時だった。私を呼び叫ぶ、父の声が遠くに聞こえた。

「何処だあー？ 返事せえー。沢あー、どっちサあるうー？ 滝いー、見えるがあー？」

その声は北側の山から聞こえた。にわかに胸が高鳴ってきたが、左下に聞こえる沢音に気付いて滝を探すと、大分上流の方に、遠目にもその大きさがわかる一筋の長い滝があった。私は声を限りにここだと叫び、山道から滝が見えることを知らせた。

「大丈夫だあー。その道いー、下りでこおーい」

すぐさま、父の声が返ってきた。胸の高鳴りはおさまらなかつたが恐怖心は薄れ、言われるままに山道を下り、やがてしばらくして、私の荷物を背負った父の姿が待っていた。何事もなかったような、父の顔が頼もしく見えた。

「よく、間違わねがったナ。間違えば、岩の目の沢サ、下りるどごだった。おめは、沢歩き、慣れでるがらだナ」

優しく聞こえる父の声にようやく落ち着きを取り戻した私は、褒められたような言い方が逆に申し訳なくて、心の底から、ごめんという言葉が洩れた。それは、これまでにない素直な気持ちだった。そのまま道を下りながら、滝を探せと叫んだ理由を教えられ、父の頭の中にはこの辺りの山が正確に入っていることに驚きを覚えた。私よりも小さな父の姿が、また頼もしく映っていた。

それから間もなく沢に入った私たちは、岩魚釣りを楽しみながら林道の入口付近の道路まで

辿り着いた。そこはもう、ダム湖が目の前だった。楽しんだと言っても釣果はわずかに一匹だけで、それは山の神が恵んでくれたようなものだが、私にはそれだけで満足だった。私たちは道に上がって竿を納め、忘れられない尻高の一日は、こうして終わった。

あれから四十年もの時が流れ私の記憶もおぼつかないが、断片的なくつかの場面は今も心に残っている。静かに眠る寝仏様、木漏れ日の差す泉、巨大な門石、切り立つ岩、お諸仏様、赤い橋、そして、名前を彫ったブナの木。私の中では古い映画の一場面のように懐かしいものとなっているが、歩きながら聞いた玉川の話も印象に残るものだった。特に、宝仙台ほうせんたいにまつわる話は歴史の浪漫を感じた。その話は文献にも記しよされていて、いにしえの昔、岩の目の小和瀬こわぜから北へ向かった宝仙台の地には館や寺があったといわれ、今でも建物の土台である基礎石が残っていると教えてくれた。そこは岩手から鹿角かづのへ抜ける街道の宿駅だったらしく、長者館と呼ばれたものがあつたとされ、その辺りには長者が住んでいたという。民謡「長者の山」は、その長者をたたえた歌とされるが、その地には戸沢氏の祖である戸沢兼盛が雫石から移り住んだ伝説もあつて、長者との関連が興味深い。その兼盛が砂金で栄えたという説も、宝仙台や小和瀬の辺りには金山があつたという話も何とも言えない浪漫を感じる。例え兼盛がそこには住まわなかったにしても、次第に勢力を増していったことから金を得ていたのは事実のような気

がして、戸沢氏の隠し金山があったのではと想像が膨らむ。私は小説にこのことを入れてみて、宝仙台を訪れることにした。

五月半ばのある日、実家から独り、途中、寝仏様に寄りながら玉川ダムを目指した。道路は随分走りやすく、だが当時の道が懐かしく思えて小野草で車を降り、いつとき旧道を歩いた。朝の柔らかな光に映える鎧畑のダム湖はあの頃と変わらぬ青い水を湛え、役目を終えて久しい道がもの淋しく続いている。長い冬から目覚めた山は萌黄色に染まり、冷たさを帯びた湖面とは対照的に温かかった。そこにはふるさとの春があった。そんな景色が古い記憶の扉を開こうとし、だが、あの春この景色をどんな思いで見ているのか忘れている自分がいて寂しかった。私は流れた時の長さを感じながら、おもむろに道を引き返した。

昔はなかった小野草のトンネルを抜けて間もなく、尻高沢林道への入口が開いていた。整備された砂利道をわずかに上ると、寝仏とある素朴な立て札が目に入り、それは大杉が立ち並ぶ右手の山を示している。そこは、こんな山だったかと驚かせる立派な森となっていた。人が通った跡らしい、春の山でもそれとわかる一筋の窪みを辿って行くと、やがて程ない所にあの巨岩が横たわっていて、数十年ぶりの寝仏様は静かに私を迎えてくれた。圧倒されながら写真に収めた記憶が甦り、懐かしい人にも再会するような感覚に父の昔語りが聞こえてくるようだ

った。

「昔ナ、オシヨブツサマ参りサ来た僧達、ここで、ひと休みしたド。……」

落ち葉が周囲に堆積して、あるいはわずかに小さくなったものか、だが、やはりそれは大きかった。見直せば確かに頭部があり、まさに奇岩である。近くに亀石という岩もあったように思うが記憶は定かでなく、それほどこの印象が強烈だったのだろう。懐かしい父の声をどこかに聞きながら、私は静かに手を合わせた。あの時言えなかった気持ちだが、父へ届けばいいと願っていた。

できるものならお諸仏様へも訪れてみたい思いはあったが、独りでは無理だと諦めて玉川へ向かった。お諸仏様は田沢鳩留尊とんぶつ仏といわれ、遙か昔に天竺てんじくから飛来した婆羅門ばらもん七仏のひとつ、鳩留尊仏が降臨して大きな岩になったと伝えられる。そのもとをたどれば山岳信仰と思うが、玉川にも自然崇拜から生まれた伝説が多く、男神おがみ、女神めがみの二神山ふたがみやまにまつわる話にはいくつかの奇岩が登場する。その男神山が次第に近づいてきて、私はうろ覚えながら父から聞いた話を思い出していた。今はその伝説を知る者も少なく、村ともども湖底に沈んだように思えて残念だが、それらの伝説といい宝仙台といい、私にとつて玉川は興味の尽きない地域である。

男神橋は男神山を正面に望む長い橋で、ダム湖の宝仙湖を跨ぎ岩の目公園へと続く。あのと

き目にした赤い橋は、どの辺りに沈むのだろうかなどと考えながら橋を渡り、宝仙台を目指して北へ向かった。そこは、初めて訪れる林道である。進むにつれてダム of 紺碧の水は遠ざかり、やがて岩の目沢が流れていて、釣り人のものらしい県外ナンバーの車が一台、沢に沿った林道の入口に駐まっていた。何となく興醒めしながら本道をしばらく上ると、小和瀬川が現れ、こんな山奥にと思うような小さな発電所が建っていた。宝仙台はここからまたしばらく上るはずで、奥の山容からこの先どんな道になるのか、果たして通れるのか予想もつかない。車を止め、躊躇する私の頭に、あの春、道に迷った恐怖がよぎり、結局、進むのは断念することにした。道の向こうにある宝仙台の村は、私の中で謎に包まれた村のまま心に残ることとなった。

小和瀬川の橋に佇む私の上を、柔らかな山の風が通り過ぎていった。足下には心地よい川音が流れ、北国の山の春を感じさせた。ここから程ない山裾には、父から聞いた小和瀬の丘陵がある。そこはかつて、田沢が馬産地として知られる始まりとなった所で、天保の飢饉のおり、馬産再興を命じられた田沢のある肝煎が藩領内の馬を集めて牧場を作ったといわれている。また、資料は乏しいが、その昔この辺りに金が出ていたという記録もあり、こんな山奥だが様々な歴史に彩られているように感じられて、兼盛が金を探してたという想像も事実かもしれないと思わせる。そんな史実もさることながら、私には、父や祖父たちの歴史が刻まれたこの山

に、父が立ったこの山にすることが感慨深かった。若かりし頃、父はここで何を思ったのだろう。戦後、定められたように家業を継ぎ、どんな思いで山に入っていたのだろうかと考えると、感傷のようなものが湧いてきた。ふと、もつと父と話しておけばよかったと後悔した。生前、父に聞けなかったことがある。長男であるがゆえに家業を継いだ父にもやりたかつた事や夢があつたはずで、それを知る機会はなかつた。だが今思えば、あるときから父には私が夢だつたのかもしれない。自分が抱いた夢は叶わず、私に夢を託したのかもしれないと思うことがあつた。そんな父に捧げる思いで、私はあの春の思い出をもとに宝仙台の伝説を織り込んだ物語を書くことにした。夢叶わぬとき人はどうしたらいいのか、考えてみようと思つた。その思いを知るよしもなく、小和瀬川は、幾年月変わりない川音を静かに奏でていた。

資料を集めるために、父が遺した村出身の直木賞作家千葉治平の著書を読んでみると、田沢や玉川にまつわる話はどれも興味をひくものばかりだつた。「山の湖の物語」という一冊を開いたとき、父手作りの葉が一枚挟んであり、そこには宝仙台にまつわる話がかかれていた。目にした私の心に感傷が訪れた。父のあの声が聞こえてきそうで、それは、お前の夢を追えと語っているようだつた。

私は葉を手にながら父を想い、小説の題名を、「夢のあと」と決めた。

夢のあと

美しふるさと

生まれ育った村は、田沢という山あいの村だった。私のふるさとである。

村のまえじわり前通という集落は南に豊かな田園が広がり、北へ上れば田澤寺でんたくじという寺が見下ろしていて、私の生家は集落の南の外れにあった。家の前の田舎道を挟んだその向こうには、前通山まえとおりやまと呼ばれるさほど高くはないが存在感のある山が田園を抱き、足下に玉川が流れ、裏側の山並の先には田沢湖が澄んだ水を湛えていた。私は、そんな長閑な村で少年時代を過ごした。



表彰式での堀川さん

堀川 茂 進

還暦を迎えるこれまでの人生で、村で過ごした時間はその半分もないだろうが、田沢は、私という人間を育ててくれた詩情あふれるふるさとである。そこでの、今は亡き父との思い出をもとにつづった文章が、こうして日の目を見ることができたことには感慨深いものがある。今回の入選は本当にうれしく、父も喜んでいるだろう。父に、そして、ふるさとに感謝したい。

田沢での思い出は尽きない。家族とのこと、恩師や幼馴染の思い出、遊んだ山川、……、そんな思い出をもとにふるさとの山野を思い浮かべながら、また文章を書こうと思う。田沢に暮らす人々が、そこに育った人たちがふるさとを想えるような話をいつの日か書きたいと思っている。

日が落ちて仄暗い中に前通山を眺めていると、私はなぜか感傷的な気分になる。記憶にもない幼いころ、誰かの背中で見ていたような、もの哀しい子守唄に涙ぐむ自分の姿が浮んできて、ふるさとの景色はそんな想いを呼び起こす。それは、いつのころからだろう。私が文章を書くのはそうした心があるからだと思っていて、そのことがありがたく、田沢の風土は感受性豊かな私に育ててくれたようだ。

田沢は、そんな、美^{うま}しふるさとである。

選

評





秋田の裏も表も存分に

内館 牧子

第五回ふるさと秋田文学賞は、間違いなく人々に浸透してきていることを感じます。今年は秋田県内からの応募者49に対し、県外からが67。ドイツからも応募がありました。

以前に他県の県職員から、

「秋田に関わりのある内容という、この縛りが面白いんだよね」

と言われたことがあります。そのとおりだなアと思わされたのですが、この縛りを狭くとらえがちになるのか、小説も随筆・紀行も、ふるさとの山や川を訪ね、そこを歩くとか思い出すとか、そういう作品が多いのは残念です。秋田がふるさとであろうとなかろうと、秋田を自分の視点であらゆる角度から見れば、かなり広がって面白いものが書けるはずですよ。

まず小説の部ですが、これは毎年問題になることです。書きたいテーマの周辺をネットや資

料で調べ、座して書いているものが目立つのです。

作家、脚本家は、ものを書く時、現地に行き、人と会い、役に立ちそうにないことをも自分の目と耳でつかまえます。他に職業を持つている応募者がそのようにはできないにせよ、できる限り、自分で取材して確かめないと、物語がいわば「ウソっぱち」になってしまいます。ご存じのように、西木正明さんと塩野米松さんは文壇でも屈指の取材派ですから、一読しただけで、これはネットで調べてるねとか、現在はこんな状況じゃないよとかすぐにわかります。書く上では、とにかくよく歩き、確かめ、対象の持つ香りを自分にまとわせることが必要だと改めて思わされています。

最終に残った六編では、「ことねとあまね」そして「入道崎恋歌」の一騎打ちという状態でした。私自身は、「ことねとあまね」は、母親が双子を差別するあたりがありきたりだと思いましたが、双子の心理が非常によく描かれています。一方の「入道崎恋歌」は若い女がなぜ老いた男に引かれるのかがわからない。そして、読者としてはラストが消化不良です。ただ、女の恐さ、凄さがよく出ていて、描写もうまい。いっそ入賞作なしで、二編を佳作にしようという話も出ましたが、人物の心理で読ませる力を評価し、「ことねとあまね」が入賞しました。

選にもれた最終四編には、私はいささか「作家都合」という姿勢を感じました。これは作家が運んでいきたい方向に、作家自身がお話を運んでいくことです。ですから破綻はないのですが、都合よくうまく収まる。人物が動いているのではなく、作家が、つまり書き手が好みの方向へ動かしているのです。これは必ずバレますし、作品をつまらなく軽くします。

「随筆・紀行文の部」では、最終に四編が残りましたが、「神代駅から」が高い評価を集め、すぐに入賞が決まりました。熊本出身の渡辺さんが秋田のW座に入り、七十一歳の今、秋田に骨を埋めようと考えている。そこに至るまでの心理が細やかに書かれ、非常にうまくて読ませます。「ふるさと」とは必ずしも生誕の地ではないことも行間から匂い立っています。

佳作は「夢のあと」でした。小説家をめざす息子が、昔、父親と行った玉川を描いています。玉川の風景や伝説と共に、あの時の父親の面影や言葉が、小説家をめざす息子の背を押す。そんな風景がセンチメンタルにならず、いい距離感で表現されています。ただ、話をつめこみすぎて、いささか焦点がぼけたことが惜しまれます。

ものを書く場合、気をつけたいとならないことが、私は二点あると思っています。ひとつはつめこみすぎないこと。書きたい対象が魅力的であればあるほど、あれもこれも書きたくなるものですが、それは散漫になり、かえって魅力を削ぐことが多いものです。一番書きたいこと

を背骨として絞ることです。選考会の時、ある委員から「書いたものを一か月置き、読み直せ」という言葉が出ました。焦点を絞る意味でも、これは非常に効果があると思います。

もう一点は、参考文献の扱い方です。ものを書く上で、多くの資料や文献をあたることは当然、必要です。しかし他のコンクールでも、コピペというか、資料をほとんど丸写ししてはいないかと疑われる作品に出会う場合があります。そこだけ自身の文体と違っていたりもします。参考文献をそのまま自身の作品に写し書くことは、犯してはならないタブーです。著作権の問題はもちろんのこと、ものを書く人間の基本的な姿勢を問われます。

今回、選にもれた方々は、ぜひまた来年応募していただきたいと思っています。この文学賞は前にダメだった方々が再び三たびと応募しており、確実にレベルアップを示してくれています。今回「小説の部」でついに入賞された渡部さんもそのお一人です。

皆様、秋田の裏も表もご自身の視点で、存分にお書きください。来年の応募を待っています。

〈脚本家 秋田市出身〉



書くことで見つける新しい世界もある

塩野米松

今年は100作品を超える応募があった。俳句や短歌には鑑賞する楽しみと自分で作る楽しみがある。同じように小説やエッセイ、紀行文を自分で書いて楽しむ人が増えたというのはいいことだと思う。自分で作ってみて、作家達の構成の巧みさ、作品に込められた努力、下調べや取材の大変さがわかってくる。

今回の応募作にも、書くことの楽しさ、工夫することのおもしろさを知っているなあと思わせる作品が見受けられたし、そうした作品が最終選考に残った。

小説部門の50枚という制限枚数はなかなか難しいハードルである。盛り込みすぎても散漫になるし、複雑な人間関係を設定する枚数ではない。

小説部門最後まで残ったのは、「ことねとあまね」（渡部麻実）と「入道崎恋歌」（畠山政文）。

渡部さんは過去に二回の入選実績がある。破綻なく物語を進めていく腕は確かだ。一卵性の双子の高校生姉妹の設定で、姉の琴音は美人、妹の天音は頭がいいが美人とはいいがたい。母は琴音をえこひいきし、いい洋服を着せられ、天音は兄のお古。物語は天音の「私」の視点で展開する。琴音の妊娠、母親の心に潜む鬼性、琴音の相手の男の軽さ。選考会ではシンデレラ的な姉と妹の設定など、物語展開のために都合がよすぎることが指摘された。それと枚数制限のためもあるが説明しすぎる。十分に話を展開していく能力をお持ちなのだから、もう一段上を目指すなら、人物や生き方を描くことが大事になる。期待したい。

畠山さんはじつに描写に長けている。随所にそのうまさがちりばめられている。この力をどう活かすかが課題だ。今回の作品は告白体で書かれている。こういうことがあったんですという文章だ。これは既に物語の結末をご存じで書いていることになる。その上で、こんな展開だったのです。ということになると、読者は読み進めるとどうなるのかという心持ちが薄れる。老いた俳句の先生と若い女弟子の恋だ。冒頭から相手女性を「あさみ」と呼び捨てで始まるから、結果は出ているのだと思ってしまうが、そうでもないらしい。部分部分は精緻に描かれるのだが、思わせぶりな展開しそうで進まない。書くことにためらいがあるのか。恋物語は

覚悟して物語を構成しなくては読者がついていけない。せつかくの表現力を活かすには物を書く覚悟が必要だ。残念。

読みようによるのだが、渡部さんの作品も畠山さんのものも、じつは女の怖さを描いたのだと思えば、領けないわけではない。狙ったものなのかわからなかったが、もしそうなら展開の仕方が変わる。

エッセイの部。「神代駅から」（渡辺礼司）は、無人駅になった田沢湖線の神代駅が舞台だ。九州出身の著者が、老いて、足が悪くなり、駅の階段をリハビリ代わりに上がりおりする。ここに来た頃は田沢湖線が開通していなかったが、それが盛岡に出られるようになり、今では新幹線が。その新幹線もこの駅は通過するだけ。この地に来て53年。来し方を振り返り、残り少ない人生を考え始めた心境が素直に描かれている。初めての作品とお聞きしたが、銜てらいなく、書きつづつてある。思いがよく現れている。いい作品でした。

「夢のあと」（堀川茂進）。数年前に父を亡くした著者。今は故郷を離れている。浪人時代に父と歩いた山のことを思い出し、現在の心境を語ったもの。盛り込まれた材料が多すぎて、整理が追いつかない。

エッセイを書くときには整理が大事である。シンプルに気持ち、心境を表すことで、読者はうなずき、共感する。そのためにはあれもこれもと書きこまないこと。それと丁寧言葉を選ぶこと。心のうちを表せる言葉を探し、大事に使うことだ。切り取り方、フレーミングも必要だ。たとえば、父と二人の名を彫り込んだブナノキを探しに行くことに焦点を絞り、父の思い出の山行を描くと焦点がはっきりするのでは。

20枚のエッセイは入れ物として大きすぎるところがある。納まりやすい枚数にまとめることを心がけた方がいい。制限枚数はそれだけ書かなければならないというものではない。この後小説を書かれるという。がんばってください。

小説もエッセイも書くコツは、途中で投げずに、とにかく書き上げること。その後、いくらでも手直しができ、これがまた楽しいのです。たくさんのお応募待っています。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉



地域文学賞として高水準の受賞作

西木 正明

これが立ち上げてわずか五回目の文学賞の候補作か。今回の候補作を読みおえての実感だった。とりわけ小説の部の候補作を読んで、その感を強くした。

この時期評者のような文学界の古狸は、そこかしこで文学賞の選考委員を仰せつかるので、目が必要以上に厳しくなっている。

小説は短いほど難しい。限られた紙幅の範囲で、自らの思いを的確に伝えるのは、ほんとうに大変だ。

「ふるさと秋田文学賞」の小説部門は、枚数制限が四百字詰め原稿用紙で50枚と、まさにその短編小説の優劣を競う舞台である。

にもかかわらず今年は、評者のような職業作家が舌を巻くレベルの短編小説を、受賞作とし

て見いだすことができた。

受賞作「ことねとあまね」を読みおえて、舌を巻いた。一卵性双生児の妹の視点で、奔放な生き方をする美人の姉を描くという、一見珍しいが、ひとつ間違うとありきたりになりそうな筋書きの見事さを支えているのは文章力。とりわけ随所に見られる、適切にして鮮やかな表現と、作品全体に感じられる、快適なリズム感はすばらしい。

「ことねとあまね」を読んでいる最中、いかにしてこういうリズム感のある文章力を身につけたのか、作者に聞きたくなった。

勝手に推測すると、この作品の作者渡部麻実氏は、子どもの頃からたくさん本を読み、すぐれた文章が自然に体内に取り込まれて、読む者を快適にする文体のリズムを、身につけた可能性がある。

佳作入選の「入道崎恋歌」も、表現力豊かな文章で構築された短編だった。

だから言うわけではないが、作者の畠山政文氏が公務員だと知って、少し驚いた。

もちろん公務員にも名文家はある。評者が勝手に私淑していた故新田次郎氏は公務員出身の作家だが、彼が仕事で書いていた公文書とは対照的に、とても読みやすい文章で、読む者を喜

ばせてくれた。

「入道崎恋歌」は長年銀行員としてまじめに働いてきた年配の男が、若い女性とつきあう時の、うしろめたさとやましさをテーマにした作品だ。

全体をですます調の柔らかな文章で、自分の娘と同じ世代の女性との逢瀬を詳細に描いているのに、嫌らしくも不自然でもない、恋愛小説のふりをした見事な官能小説である。

随筆・紀行文の部の受賞作「神代駅から」は、読んでいて懐かしさがこみ上げてきた。

著者の渡辺礼司氏は九州の出身で、五十三年前、劇団W座で役者になるつもりで秋田に來た。異なる地域出身者の新鮮な目で、当時の生保内線神代駅界隈の光景が、鮮やかに描かれている。

佳作入選の「夢のあと」は、秋田在住の公務員堀川茂進氏が描いた、独特の雰囲気を持った作品で、若き日の思い出を辿った、懐かしさに満ちた作品である。

おしむらくはやや書き込みすぎて、全体の感じがだれてしまった。書き込みすぎは、時として作品の致命傷になることもあるので、注意していただきたい。

以上、来年以降の「ふるさと秋田文学賞」を勇気付ける、作品授賞の報告である。

〈作家 仙北市（旧西木村）出身〉

特別寄稿

真理を表す二つの様式

柴山芳隆

小説の目的は、人生のある真理を虚構を用いて具現することにある。「虚構を用いて」というところがエッセイとの相違である。

具現する方法として、対照的な二つの様式があるが、それは、人間に生まれつき備わっている属性から生じてくる必然的なものと言える。誤解を恐れずに分かりやすい例えを挙げれば、文系と理系、右利きと左利きの類である。

元来、人は誰でも、まずは衣食住をきちんと整えたいという現実的欲求と、生活の基礎を整えたいという心の豊かさを求めたいという空想的欲求を併わせ持っている。しかし、それを五分五分に有する人間は少なく、現実肌か空想肌か、どちらかに傾いているのが普通である。それが作品の上にもおのずからにして反映し、一方が他方を圧倒して、作品の基調をなす色彩ともなる。リアリズム（写実主義）とロマンティズム（浪漫主義）の二つがそれである。

ヨーロッパ近代の大作家を例にとれば、ゾラ、ストリンドベリー、モーパッサンなどは写実派で、スタンダール、ユゴー、メリメなどは浪漫派に分類できる。フローベルのように、本来写実派に属しながら時によつて病的なほど浪漫的な作品をもつた作家もいないではないが、そうした書き手は少ないようである。

この、写実派と浪漫派との間に介在する距離は人間の心に本質的に根ざすものであるから、作家のみでなく読者の嗜好にも影響を及ぼしてくる。もつとも、概して青少年の頃は多くロマンティックな作品を好み、年齢を重ねるにしたがつて次第にリアリステックな作品に親しみを感じるのが一般的ではあるが。

対照的な二つの様式を比較考量すると、まず、リアリストはあるがままの人生を示そうとし、ロマンティストはあるべき人生を示そうと試みる。つまり、後者の方が理想主義的なのである。またリアリストは自分と同じ時代や場所を描き、ロマンティストは時空の隔たる方面に題材を求めることが多い。時代小説作家は、基本的には浪漫主義者ということになる。

次に、写実派の作家はより多く科学的発見に興味を持ち、浪漫派の作家は芸術的表現により多くの興味を有する。さらに、写実派が人間の性格的要素に大きな関心を示すのに比し、浪漫派は人間社会の事件的要素に深い関心を抱いている。冷徹な殺人事件などを扱いたがる人は意

外にも浪漫主義的傾向が強いのである。

つけ加えれば、写実派の人々は帰納的な思考方法で着実に真理に迫っていくとする一方、浪漫派の人々は演繹法で一挙に真理を把握したいと希求している。それゆえ、リアリストにとっては目と耳が非常に大切であり、ロマンティストには確かな直観力が要求されることになる。

その当然の帰結として、写実主義者は写真屋（「写真家」ではない）に墮しやすすい危険性を伴っているし、浪漫主義者は独断ないし独りよがり陥りやすい傾向を免れがたい。くれぐれも心する必要がある。

エッセイにせよ小説にせよ、自分の資質に合った、あるいは資質を生かした作品を創り出していくと佳いものに仕上がっていく。それが逆になってしまうと、「木に縁りて魚を求む」ということわざの世界に近づいてしまい、苦勞ばかりでなかなか満足いく結果は得られないものである。リアリストは写実主義風の、ロマンティストは浪漫主義的な作品の創作に励むのが自然で、それが成功への道にもつながっていくのである。

ただ、自分の資質がどちらなのかというのは簡単には判別しがたいものでもある。原稿用紙に筆を下ろす前に、いま一度自分自身としっかり向き合ってみるようになることが必要なのではなからうか。

〈作家 秋田市在住〉

秋田県の読書活動推進施策

～日本一の読書県をめざして～

秋田県は、全国に先駆けて読書条例（秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成22年4月1日施行））を制定し、また毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

H28～32年度は「第2次秋田県読書活動推進基本計画」に基づき、「あなたの『読みたい!』をサポートします」、「『読書は楽しい!』の気持ちを広げます」という県民運動の視点で、県民の共感を高めながら読書活動を推進しています。



©2015 秋田県んだッチ

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部署局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係12課所で構成》

総合政策課	次世代・女性活躍支援課
長寿社会課	障害福祉課
教育庁総務課	幼保推進課 義務教育課
高校教育課	特別支援教育課
生涯学習課	県立図書館
生涯学習センター	

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と25市町村で構成》

市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課
県総合政策課
教育庁総務課 生涯学習課

≪H30年度県の読書活動推進の取組≫

○ふるさと文学と読書のつどい2018 in 能代 (10/27<土>)

※能代市ほか関係団体と実行委員会を組織して実施

11月1日の「県民読書の日」にちなんだイベントとして、能代市二ツ井公民館で開催し、地元能代市を中心に全県から約320名が参加しました。

第1部「第5回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、表彰のあと、選考委員の内館牧子さん、塩野米松さん、西木正明さんに選評をお話いただきました。

第2部トークショー「読書芸人光浦靖子のステキな読書の世界」では、タレントの光浦靖子さんが能代市出身の放送作家元祖爆笑王さんの質問に答える形で「時間を忘れるほど没頭できるのが読書の魅力。難しく考えずに気軽に本と向き合ってください。」などと読書の目的や魅力を語りました。

参加者からは、「選考委員の選評を聞く時間はとてもすばらしいひとときでした。」「最近本を読まなかったのですが、また本を読みたくくなりました。楽しかったです!」等の感想が寄せられました。



元祖爆笑王さんと光浦靖子さん

○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、保育所等に贈って子どもたちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23～29年度までの7年間で895名の方々から寄贈があり、778か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子どもたちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。随時受付していますので、ぜひご利用ください。



○プロスポーツ等連携読書推進事業

若者を中心とした県民の読書意欲を喚起するため、県内のトップアスリートによる「おすすめの一冊」紹介動画と、プロスポーツ運営企業の社長と県内大学生によるトーク動画を制作し、動画投稿サイトYouTubeで配信しています。

【「おすすめの一冊」紹介動画】

北都銀行バドミントン部

米元小春選手、田中志穂選手

秋田銀行女子バスケットボール部

伊藤美和子選手、矢上若菜選手



米元選手・田中選手

【トーク動画】

株式会社ブラウブリッツ秋田岩瀬代表取締役社長×県立大学学生

秋田ノーザンハピネッツ株式会社水野代表取締役社長×国際教養大学学生

○読書活動推進パートナー支援事業

企業や民間団体を読書活動推進パートナーとし、住民が身近な所で読書に親しめる環境づくりに取り組む市町村を支援する事業としてH29年度から3年間の計画で実施しています。H29年度は5市町、H30年度は8市町村に読書コーナーが設置されました。

～ウェブでも、読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>

- ・ふるさと秋田文学賞
- ・おすすめの本
- ・イベント情報
- ・読んだッチ・リレー文庫等

○Twitter「あきたブックネット」

@akita_dokusho

○YouTubeチャンネル「あきたブックネット」



作品募集要項・応募者内訳



第5回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

- 募集作品 ○テーマ 秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・人物・文化・風土・物産などを題材とした小説、随筆、紀行文
○部門 「小説の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「随筆・紀行文の部」……A4判の400字詰め原稿用紙20枚以内

- 応募資格 年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

- 作品募集期間 平成30年4月1日(日)から平成30年7月31日(火)まで
郵送の場合は、当日消印有効です。
直接お持ち込みされる場合は、平日の午前9時から午後5時までとします。

ご注意
送付部数は
4部(コピー可)
です。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/県産品および賞金50万円)
	ふるさと秋田文学賞(佳作)……1編(正賞/賞状 副賞/賞金5万円)
「随筆・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/県産品および賞金30万円)
	ふるさと秋田文学賞(佳作)……1編(正賞/賞状 副賞/賞金3万円)

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

- 選考委員 1次選考委員 柴山 芳隆 氏 (作家 秋田市在住)
最終選考委員 内館 牧子 氏 (脚本家 秋田市出身)
塩野 米松 氏 (作家 仙北市:旧角館町出身)
西木 正明 氏 (作家 仙北市:旧西木村出身) (五十音順)

- 応募要領 ○原稿 ・原稿は縦書きとします。(ワープロ原稿は横長A4判の白紙に40字×30行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記)
・電子データでの応募は不可とします。
・日本語で書かれた自作未発表のもので、各部門1人1編に限りませう。
・同部門への二重投稿は失格とします。
- 表紙 ・応募作品には<表紙>として、作品のジャンル、題名、原稿枚数、氏名、郵便番号、住所、電話番号、年齢、性別、職業(学生の場合は学校名)、引用または参考とした文献・資料、募集を知ったきっかけ(新聞・雑誌名、ホームページ等)を明記してください。
・<表紙様式>は「美の国あきたネット」(HP)に掲載しています。
・題名と氏名には必ずふりがなを明記してください。
・ペンネーム使用の場合は、本名(ふりがな)を必ず明記してください。
- あらすじ ・200字程度にまとめたあらすじを表紙の次のページに添付してください。
- 応募部数 ・4部お送りください(送付原稿はコピー可)。
- 個人情報 ・応募原稿に記入された個人情報は、本文学賞の選考、結果等の連絡を目的に使用し、あらかじめご本人の同意なく第三者に開示しません。
- 著作権等 ・応募作品は一切返却しません。
・入賞作品の著作権はすべて主催者に帰属します。

- 選考結果の発表 ・平成30年10月中旬に、入賞者へ直接通知するとともに、ホームページでも発表します。
・表彰式は、平成30年10月27日(土)「ふるさと文学と読書のつどい2018in能代」で行う予定です。

- 応募・問合せ先 秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班
〒010-8570 秋田県秋田市山王四丁目1番1号
電話 018-860-1216 <平日:午前9時~午後5時>

第5回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧(H30)

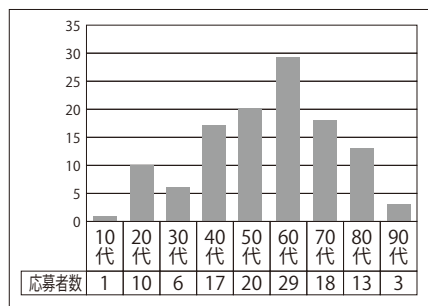
部門別応募数(編)

小説	71
随筆・紀行文	46
計	117

男女別応募者数(人)

男	66
女	51
計	117

年代別応募者数(人)



都道府県別応募数(人)

県内	49
県外(国内)	67
北海道	1
青森県	0
岩手県	1
宮城県	9
山形県	1
福島県	0
茨城県	5
栃木県	2
群馬県	1
埼玉県	4
千葉県	2
東京都	13
神奈川県	2
新潟県	0
富山県	0
石川県	0
福井県	1
山梨県	0
長野県	1
岐阜県	0
静岡県	1
愛知県	4
三重県	1
滋賀県	1
京都府	0
大阪府	2
兵庫県	5
奈良県	0
和歌山県	0
鳥取県	0
島根県	0
岡山県	0
広島県	1
山口県	1
徳島県	0
香川県	1
愛媛県	0
高知県	1
福岡県	1
佐賀県	2
長崎県	0
熊本県	1
大分県	0
宮崎県	2
鹿児島県	0
沖縄県	0
国外(ドイツ)	1
合計	117

第5回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 平成三十一年二月一日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課



秋田県